

令和元年度

ファカルティ・ディベロップメント
推進委員会活動報告書

令和2年3月

兵庫教育大学ファカルティ・ディベロップメント推進委員会

令和元年度ファカルティ・ディベロップメント推進委員会活動報告書

【目次】

I	令和元年度F D活動の概要	1
1.	令和元年度の活動概要	2
2.	令和元年度中期計画・年度計画	5
3.	令和元年度の主なF D活動一覧	6
II	1年間の活動実績	7
1.	令和元年度「学生による授業評価」実施結果	8
2.	「学生による授業評価」に関するアンケート結果（平成30年度実施）	11
3.	「ベストクラス」の選定、公表及び授業公開	14
4.	アクティブ・ラーニング研究会の実施	29
5.	アクティブ・ラーニング実施状況についての調査報告（平成30年度実施）	41
6.	授業改善の具体的指針	48
7.	令和元年度 他大学等のF D研究会等参加状況一覧	54
III	資料	55
1.	本学におけるF Dの定義について	56
2.	兵庫教育大学におけるF D推進活動への取り組み	57
3.	国立大学法人兵庫教育大学ファカルティ・ディベロップメント推進委員会規程	58
4.	授業公開の実施に関する申合せ	61
5.	本学におけるF D推進委員会と教育研究組織との関連図	62
6.	ファカルティ・ディベロップメント推進委員会委員名簿(令和元年度)	63

I 令和元年度 F D 活動の概要

I. 令和元年度 F D 活動の概要

1. 令和元年度の活動概要

本年度は、授業評価の形式を受けて、その実施及び結果の検討がなされた。さらに、授業におけるアクティブ・ラーニングの推進に向けた取組が継続された。大学院の改組により、教職大学院の定員が大幅に増えたことから、特に実習科目に関する F D 活動の充実が求められるようになるため、昨年度まで教職大学院が独自に進めてきた実習の授業評価について、F D 推進委員会が全学的な取組として進めることとなった。また、さらに、令和元年度には平成 28～30 年度自由記述による分析を元に「授業改善の具体的指針」への項目追記、及び改訂に取り組んだ。

具体的には、F D 推進委員会が 5 回、学生・教職員 F D 交流会が 2 回開催された。各回の F D 推進委員会の主な議題に注目すると、表 1 のようになる。本年度は、1) 新しい授業評価実施とそのふりかえり、2) アクティブ・ラーニング拡充への取り組み、3) ベストクラスの選定が、本委員会の主たる活動であったことがわかる。

表 1 F D 推進委員会における主な議題

各回	主な議題名
1回	令和元年度におけるFD活動の取り組みについて
2回	平成30年度授業科目におけるベストクラスの選定について
3回	アクティブ・ラーニング研究会について 教職大学院実習科目授業評価について
4回	令和元年度FD推進委員会活動報告書の作成について
5回	「授業改善の具体的指針」改訂について

(1) 新しい授業評価実施とそのふりかえり

昨年度より学部・修士課程と専門職学位課程が統一の授業評価票を用いて学生による授業評価を行うようになったが、本年度は教職大学院実習科目の評価*も加えた。後者に関してはネット上におけるアンケートの実施であったため、回答率等に課題を残した。授業評価票の項目は、本学での授業改善の指針となり得るものであり、教職員と受講者である学生とが共有すべきものであると考えられる。「授業改善の具体的指針」改訂版を含めて、今後より一層教職員・学生への周知と議論、認識の一致を進める必要がある。

(2) アクティブ・ラーニング拡充への取り組み

例年通り、教員に対して、F D 推進委員会が実施する研究会や授業公開に少なくとも 1 回は出席するよう依頼し、日常的な F D 活動の意識化及びアクティブ・ラーニング拡充への理解を求め、研究会・公開授業にのべ 71 人の参加を得た。加えて、学生の F D 活動への参画も奨励し、F D 交流会やアクティブ・ラーニング研究会への学生の参加を得た。また、昨年度に引き続き、アクティブ・ラーニング推進のために授業充実への取組として、教員に対して関西地区 F D 連絡協議会「シリーズ大学の授業を極める」(動画教材)の紹介、各 F D 活動に関する公開研修会の紹介などの取組を進めた。

アクティブ・ラーニング拡充への取組については、ベストクラスに選定された授業について、授業公開を実施した。前期では、加東キャンパスで授業公開の後、第 12 回アクティブ・ラーニング研究会を実施(7/4「障害児医学特論」高野美由紀教授)して、参加者で授業のありかたを検討した。その他、2 回の授業公

開（6/11「社会心理学に基づく学級経営の実践開発」竹西亜古教授、7/11「学習指導と学校図書館」福原優子非常勤講師）を行った。後期にも、3回の授業公開を実施（11/21「初等音楽科教育法」八代健志特任准教授、12/10「教育方法論」安藤福光准教授、1/30「人間的成長を促す教育の理論と実践」大関達也准教授・中間玲子教授）して、教員間の相互研修の場を設けた。

アクティブ・ラーニング研究会は2回開催され、2回目は京都大学の矢守克也教授をお迎えして、第13回アクティブ・ラーニング研究会「アクションリサーチの魅力と課題」を実施した。防災教育授業におけるアクションリサーチの実践について、研究の検証に関する知見も交えて紹介いただいた。なお、本研究会には、教員以外にも学外の教育関係者や多くの学生が参加した。

（3）ベストクラスの選定

ベストクラスの選定については、平成30年度の授業を対象に、学生・教職員FD活動交流会での協議、FD推進委員会での審議を経て、10のベストクラスを選定した。ベストクラスの選定にあたっては、学生による授業評価の評価項目の平均値が3.5以上の授業科目を対象として、授業規模、授業形態、履修年次、科目区分を考慮に入れ、学部、修士、専門職学位課程の授業の中から、自由記述をもとに10程度に絞り込んだ。その後、授業担当者、受講学生へ授業についての聞き取り調査を行い、最終的に選定されたベストクラスが、15頁の表である。平成30年度ベストクラスとして選定された前期開講科目及び令和元年度ベストクラスとして選定された後期開講科目については授業の公開を依頼した。

（4）今後の課題

次年度以降のFD活動の取組みの課題として、学生のFD活動へのより積極的なコミットをあげておきたい。学生と教員の双方がFD活動やアクティブな授業について議論することが、より充実した授業への提示につながるということを、学生、教員がともにより自覚することが重要であるとする。今年度を実施した教職大学院実習科目の授業評価は、これまでの教職大学院における授業評価を継承したものである。これまでの実習に関する知見の集積と併せて、新しく開設された諸コースを初めとする実習への取組に活かされるよう、その活用が期待される。

教員はこの間、学内のFD活動への参画の意識が向上し、アクティブ・ラーニングへの意欲の高まりも見られるようになった。但し、より積極的に他大学のFD活動に参加し、他大学の活動から学ぶ必要があるとも思われる。本学では、今後、よりアクティブ・ラーニングの展開を進めることが求められており、それらの充実が学生がアクティブ・ラーニングについての考え方や指導法を身につけるような授業にもつながることを意識的に展開していかなければならない。引き続き学内で実施する授業公開やアクティブ・ラーニング研究会に、教員が少なくとも年に1回は参加することが望まれるところである。

* 教職大学院実習科目授業評価項目

- ① 実習に際して、コースでの事前指導（オリエンテーション、アドバイス、情報提供、実習校との調整等）は、実習の効果的な実施に役立った。
- ② 私は、実習に際して、自分自身の事前の準備（課題の焦点化、内容やスケジュールの検討、実習校との事前打ち合わせ等）を適切に行うことができた。
- ③ 実習の内容や進め方は、実習目的を達成するのにふさわしいものだった。
- ④ 私は、実習での経験をその都度振り返り、理解を深める努力をした。
- ⑤ 私は、実習を通して、ものの見方や考え方について知的刺激を受けた。
- ⑥ 実習先での受け入れ（メンターの指導等）は、実習目的を達成するのにふさわしいものだった。
- ⑦ 大学からの支援（教員訪問や中間報告会等）は、実習目的を達成するのに役立った。
- ⑧ 実習の期間や時期は、実習目的を達成するのに適切なものだった。（小学校教員養成特別コースの方は回答の必要なし）
- ⑨ 実習は、大学院での授業科目で学んだ成果を統合できるものだった。
- ⑩ 実習は、修了時に提出する「特定の課題についての学修の成果」（もしくは「教育実践研究報告書」）の充実に役立った。
- ⑪ 実習は、将来、教員（教育専門職）としての資質・能力の開発に役立ちそうだ。
- ⑫ 実習は、総合的にみて満足 of いくものだった。

①～⑫の回答欄

4：そのとおり 3：ほぼそのとおり 2：あまりそうではない 1：そうではない

2. 令和元年度 中期計画・年度計画

令和元年度のファカルティ・ディベロップメント推進委員会に係る中期計画及び年度計画は次のとおりである。

中期計画12	教育活動に対する評価結果を教育の質の向上や改善に結びつけるため、ファカルティ・ディベロップメント推進委員会を中心とした組織的取組により、ベストクラスの選定、教員養成スタンダードのカリキュラムマップの改善等、全学的なファカルティ・ディベロップメント活動を推進する。
年度計画12	学生・教職員のFD活動交流会においてベストクラスの選定を行い、評価される授業の要素を学内教員に公表し、授業改善に活用させる。ベストクラスに選定された授業を学内外に公開し、アクティブ・ラーニングに関する研究会を学外者も対象として開催する。

(実施組織：FD推進委員会)

中期計画02	学生の主体的な学修を組織的に推進するため、アクティブ・ラーニング等の授業形態や授業方法を拡充し、併せて、学生に能動的な学習指導法、及びそれを通して育成すべき資質・能力とは何かを修得させる。また、学修時間の確保、シラバスの充実及び学修成果の可視化に取り組む。
年度計画02	アクティブ・ラーニング等の授業形態や授業方法の拡充に取り組む。また、「クラスセミナーⅠ・Ⅱ」を中心に、アクティブ・ラーニングを取り入れた学生の主体的な学修を推進し、修得すべき資質や能力について学生自身に考えさせる。学修時間の確保を促す取組を行い、教育支援システムを活用した学修成果の可視化を行う。
中期計画05	学生の主体的な学修を組織的に推進するため、アクティブ・ラーニング等の授業形態や授業方法を拡充し、併せて、学生に能動的な学習指導法、及びそれを通して育成すべき資質・能力とは何かを修得させる。また、教員養成スタンダード（大学院）に示された資質・能力の観点から授業内容・方法を見直し、シラバス改善、学修成果の可視化に取り組む。
年度計画05	アクティブ・ラーニング等の授業形態や授業方法の拡充に取り組む。また、高度専門職業人としての資質や能力が育成されているか、学修成果の可視化に取り組むとともに、課題を整理する。

(実施組織：学部教務委員会(02)、大学院教務委員会(05) FD推進委員会(02, 05))

中期計画03	厳格な成績評価を行うため評価方法を見直すとともに、学生による授業評価の結果の分析を行い、授業改善の具体的指針を明確化する。また、卒業認定については、新任教員としての資質や能力を着実に育成する観点から、ディプロマ・ポリシーに従って、卒業判定基準に基づき厳密に行う。
年度計画03	ディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシーとの整合性を吟味し、学修成果の評価の方針を明示する。それをもとに厳格な卒業判定基準により卒業認定を行う。これまでの実績を踏まえ、授業改善の具体的指針を定める。学生による授業評価や教員の授業についての意見交換を通して、組織的な授業改善活動を推進する。
中期計画06	厳格な成績評価を行うため評価方法を見直すとともに、学生による授業評価の結果と教員養成スタンダード（大学院）の観点から、授業改善の具体的指針を明確化する。また、修了認定については、教育に関連する質の高い人材を育成する観点から、ディプロマ・ポリシーに従って見直し、厳格化した修了判定基準に基づき厳密に行う。
年度計画06	ディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシーとの整合性を吟味し、学修成果の評価の方針を明示する。それをもとに厳格な修了判定基準により修了認定を行う。これまでの実績を踏まえ、授業改善の具体的指針を定める。学生による授業評価や教員の授業についての意見交換を通して、組織的な授業改善活動を推進する。

(実施組織：学部教務委員会(03)、大学院教務委員会(06) FD推進委員会(03, 06))

3. 令和元年度の主なFD活動一覧

日 付	事 項
令和元年 5月11日	関西地区FD連絡協議会第12回総会出席
令和元年 5月14日	ファカルティ・ディベロップメント推進委員会（第1回）
令和元年 6月26日	第1回学生・教職員FD活動交流会（ベストクラス選定作業）
令和元年 6月11日 ～7月11日	ベストクラス選定科目の授業公開（前期）
令和元年 7月 4日	第12回アクティブ・ラーニング研究会 「ベストクラスのうちの1科目を授業公開及び授業研究会」
令和元年 7月 2日 ～前期科目終了日	前期「学生による授業評価」実施
令和元年 9月19日	第2回学生・教職員FD活動交流会（ベストクラス候補科目を選定）
令和元年 9月27日	ファカルティ・ディベロップメント推進委員会（第2回）
令和元年10月	平成30年度授業科目における「ベストクラス」を公表（大学Webサイト）
令和元年11月21日 ～ 1月30日	ベストクラス選定科目の授業公開（後期）
令和元年12月23日	ファカルティ・ディベロップメント推進委員会（第3回）
令和元年12月26日 ～令和 2年 2月20日	評価される授業の要素
令和 2年 1月 7日 ～後期科目終了日	後期「学生による授業評価」実施
令和 2年 1月27日	第13回アクティブ・ラーニング研究会 「アクションリサーチの魅力と課題」
令和 2年 2月 8日 ～令和 2年 3月 6日	「兵庫教育大学教職大学院実習科目授業評価」実施
令和 2年 3月12日 ～令和 2年 3月18日	ファカルティ・ディベロップメント推進委員会（第4回）
令和 2年 3月27日	ファカルティ・ディベロップメント推進委員会（第5回）

Ⅱ 1年間の活動実績

1. 令和元年度「学生による授業評価」実施結果

【令和2年度 前期「学生による授業評価」実施結果】

1. 実施時期

7月1日～前期科目終了まで

（7月1日以前に授業が終了する場合は、終了前に調査票を配付し、随時実施）

2. 実施方法

(1) 授業評価調査票によるアンケート調査とする。

(2) 調査票の配付及び回収方法は、次のとおり。

- ・ 授業終了までに、授業担当教員が授業評価調査票を受講生に配付する。
- ・ 調査票の回収は、受講生の代表者が行い、回収用封筒に入れて、その場で封をして教員に渡す。
- ・ 教員が学務課教務企画チームへ封筒を提出する。

(3) 次の点を学生に周知し、実施する。

- ・ この調査は学生の授業への取組や理解度を把握し、授業の改善を行うために実施するものであること。
- ・ 成績に影響することは全くないので、授業を受けて感じたことをそのまま回答して欲しいこと。
- ・ 複数の教員が分担をしている授業は、授業科目全体としての評価をすること。教員ごとの評価をしたい場合は、自由記述欄に記入すること。
- ・ 項目⑬「授業の目的、内容、方法について教員間で連携がなされていた。」及び項目⑭「「理論と実践の融合」について配慮がなされていた。」の回答の有無については教員の指示に従うこと。

3. 調査結果の活用

集計結果については、教員にフィードバックし、授業の内容・方法等の改善に活かすとともに、必要に応じて教員のコメント等を付記し、個々の授業科目ごとに公表（学内限定）する。

4. 実施結果（最終集計結果）

対象科目数（A）	500
実施科目数	489
未実施科目数（B）	11
未実施科目割合（（B）÷（A））	2.2 %

※未実施理由

- ・ 実施を失念していた。または、返却なし。（10科目）
- ・ アンケート調査を配付する前に終了していた。（1科目）

【令和元年度 後期「学生による授業評価」実施結果】

1. 実施時期

1月7日～後期科目終了まで

(1月7日以前に授業が終了する場合は、終了前に調査票を配付し、随時実施)

2. 実施方法

(1) 授業評価調査票によるアンケート調査とする。

(2) 調査票の配付及び回収方法は、次のとおり。

- ・ 授業終了までに、授業担当教員が授業評価調査票を受講生に配付する。
- ・ 調査票の回収は、受講生の代表者が行い、回収用封筒に入れて、その場で封をして教員に渡す。
- ・ 教員が学務課教務企画チームへ封筒を提出する。

(3) 次の点を学生に周知し、実施する。

- ・ この調査は学生の授業への取組や理解度を把握し、授業の改善を行うために実施するものであること。
- ・ 成績に影響することは全くないので、授業を受けて感じたことをそのまま回答して欲しいこと。
- ・ 複数の教員が分担をしている授業は、授業科目全体としての評価をすること。教員ごとの評価をしたい場合は、自由記述欄に記入すること。
- ・ 項目⑬「授業の目的、内容、方法について教員間で連携がなされていた。」及び項目⑭「理論と実践の融合」について配慮がなされていた。」の回答の有無については教員の指示に従うこと。

3. 調査結果の活用

集計結果については、教員にフィードバックし、授業の内容・方法等の改善に活かすとともに、必要に応じて教員のコメント等を付記し、個々の授業科目ごとに公表（学内限定）する。

4. 実施結果（最終集計結果）

対象科目数（A）	451
実施科目数	422
未実施科目数（B）	29
未実施科目割合（(B) ÷ (A)）	6.43%

※未実施理由

- ・ 実施を失念していた。または、返却なし。(16科目)
- ・ 終盤に遠隔授業等実施により集まる機会がなかった。(8科目)
- ・ アンケート調査を配付する前に終了していた。(5科目)

【令和元年度 「教育実践高度化専攻実習科目授業評価」実施結果】

1. 実施時期

2月13日～3月13日まで

2. 実施方法

(1)Webフォームによるアンケート調査とする。

(2)教育実践高度化専攻の学生を対象に LiveCampus の学内アンケート機能を使用して実施する。

(3)次の点を学生に周知し、実施する。

- ・この調査は学生の実習への取組や理解度を把握し、実習の改善を行うために実施するものであること。
- ・回答は一括で統計的に処理され、回答が成績に影響することは全くないので、実習を受けて感じたことをそのまま回答して欲しいこと。

3. 調査結果の活用

集計結果については、コースにフィードバックし、実習科目の改善に活かし、公表（学内限定）する。

4. 実施結果（最終集計結果）

対象科目数（A）	20
実施科目数	17
未実施科目数（B）	3
未実施科目割合（ $(B) \div (A)$ ）	85.0%

- ・履修者数 203人
- ・回答者数 103人（50.7%）

「学生による授業評価」に関するアンケート結果（平成30年度実施）

- ・実施期間：H31.3.7～H31.3.14
- ・実施方法：LiveCampusのアンケート機能利用による記述式
- ・対 象：学部生・大学院生
- ・回答数：学部10件、修士46件、専門職18件、合計74件
- ・分析手続き：まず、意味の類似している記述をまとめ、そのまとまりを表現する言葉をカテゴリーとして析出。つぎに、そのカテゴリーについて意味的に類似しているものをまとめ、そのまとまりを表現する言葉を上位カテゴリーとして析出した。

1. 授業評価項目についての意見		
授業評価の項目について、実際に今年度回答してみてどのように感じましたか。感じたことを自由に記述してください。		
カテゴリー 1	カテゴリー 2	カテゴリー 3
評価項目	項目内容	適切
		回答しづらい
		共通項目＋教員独自項目の必要性
		自由記述の充実
		ゼミ評価の必要性
		改訂前の項目との違いがわからない
	項目数	過多
	回答の手続き	複数担当教員の場合の評価の難しさ
		回答環境 (教員のもとでは書きづらい)
		教員による教示の不徹底
効果	学びの促進	予習時間不足の自覚
		振り返りの機会
		学びの観点の提示
	授業者への指針	
その他	授業改善への期待	
	意見する方法として必要	
	評価行為への懷疑	
	授業評価の意味についての問い直し	

2. 現在の授業評価の実施方法についてどう思うか

授業評価の実施方法について、実際に今年度回答してみてどのように感じましたか。感じたことを自由に記述してください。

カテゴリー 1	カテゴリー 2	カテゴリー 3
全般	肯定的	
	否定的	
項目内容	授業規模等を考慮した項目設定の必要性	
回答	時間	
	期間	
	実施時期	最終回の問題（誰のためのものか、回答が最終回に集中する等）
		集中講義の場合
	環境	周囲が気になる
		教員が気になる
	方法	教員ごとの評価（複数教員の場合）
		オンラインでの実施
		回答は希望者のみに
手続き	教員による教示	教員間の非統一性
		授業評価に対する姿勢
	回収方法	
その他	評価行為の問い直し	
	オムニバス形式の授業評価の難しさ	

3. 授業評価への提案(観点・方法など)	
授業評価について、提案したいことがあれば、自由に記述してください。	
カテゴリー 1	カテゴリー 2
実施内容	項目の具体性
	自由記述の充実
実施手続き	中間評価の実施
	回答時間の設定
	回答期間の設定
	オンラインでの実施
	受講者ごとの評価用紙
	教員ごとの評価（複数教員の場合）
授業評価の仕組み	経年変化の可視化
	「教員のコメント」の充実
	ベストクラスとの接続
その他	意味の問い直し

3. 「ベストクラス」の選定、公表及び授業公開

平成 27 年度から選考を開始した「ベストクラス」について、本年度は、平成 30 年度開講科目の「ベストクラス」として 10 の授業科目を選定した。

●「ベストクラス」という概念について

「ベストティーチャー賞」なら、すでにいくつもの大学が制度として導入しているが、本学は、「ベストティーチャー」でも「賞」でもない、「ベストクラス」である。なぜ「ベストティーチャー」でないのか、そして、なぜ「賞」でないのか。ここに、「ベストクラス」という概念に込められたユニークな企図がある。

なぜ「ベストティーチャー」でないのか。授業は教員の努力だけでよいものにはならない。教員のみならず、学生の高い参加意識があってはじめてよくなる。そうだとしたら、授業を担当する教員にのみ焦点があてられる「ベストティーチャー」という表現はふさわしくない。

なぜ「賞」でないのか。「ベストクラス」は、優れた授業のモデルや規準を定め、それにあてはまるものを選ぶのではない。授業にはそれぞれ異なった意図やねらいがあるはずであり、それを一つの規準で評価することは授業の画一化を招きかねない。優れた授業とはどのようなものかという問いを失った瞬間に、優れた授業の多様性が失われる危険性がある。このように考えたとき、「賞」はなじまない。

●「ベストクラス」の選定

「ベストクラス」の選定にあたっては、学生と教職員が FD について公式に協議する「学生・教職員 FD 活動交流会」が大きな役割を果たしている。

選定の流れは、次の通りである。まず、前年度の授業評価結果の自由記述を検討して候補となる授業科目を選ぶ。つぎに、「学生・教職員 FD 活動交流会」のメンバーが、授業担当教員と受講者の双方にインタビューを行い、選定理由書を作成する。そして、それを FD 推進委員会で議論して最終的に選定するのである。

この過程では、学生と教職員が協働して作業にあたる。よい授業とはなにか、率直な意見交換が行われ、学生にとっても教職員にとっても、授業について思考する刺激的で貴重な機会となっている。

●「ベストクラス」の目的

本学の教育の質の向上のため、よい授業を教職員と学生が共有することにある。選ばれた授業科目のそれぞれにある「持ち味」を共有していただければ幸いである。

●ベストクラス選定科目の授業公開

本年度は、よい授業を教員間で共有することを目的として、ベストクラス選定科目について、前期は平成 30 年度選定科目から 3 科目、後期は令和元年度選定科目から 3 科目の授業公開を行った。

また、前期の 1 科目については、第 12 回アクティブ・ラーニング研究会として、授業公開の後、授業研究会を行い参加者で意見交換を行った。

ベストクラス選定結果一覧(平成30年度開講科目)

令和元年9月27日第2回FD推進委員会

課程	科目名称	履修年次	担当教員 下線は非常勤講師	科目区分	受講者数	教室	開講時期
学部	初等音楽科教育法（Bクラス）	2	八代 健志	教育実践・リフレクション科目群／初等教科指導法科目	87	芸術棟 100	前期 水2
	学習指導と学校図書館	1～4	<u>福原 優子</u>	教職キャリア科目群／教職支援科目	33	共通講義棟 304	前期 木5
	初等社会Ⅰ（小C（大学院）クラス）	1	關 浩和	教育実践・リフレクション科目群／初等教科内容科目	26	共通講義棟 304	前期 木3
	教育方法論	2	安藤 福光	教職キャリア科目群／教職支援科目	175	共通講義棟 106	後期 火3
	養護の基本	1	加納 史章	教職キャリア科目群／教職支援科目	25	共通講義棟 104	後期 火3
大学院 （修士）	国語系教育内容論Ⅳ（古典語）（夜間クラス）	1	田中 雅和	専門科目／教科教育実践開発専攻／言語系教育コース／ 教科内容の理解を深める教科専門科目群	4	演習室10 （神戸HLC）	前期 水7
	行動障害支援論（昼間クラス）	1	井澤 信三	専門科目／特別支援教育専攻／特別支援教育の理論と実 践を学ぶ科目群	43	共通講義棟 113	後期 木2
	教育文化の歴史（夜間クラス）	1	平野 亮	専門科目／人間発達教育専攻／専門領域科目群	13	講義室2 （神戸HLC）	後期 火6
大学院 （専門職）	人間的成長を促す教育の理論と実践A（昼間クラス）	1	吉水 裕也 大関 達也 平野 亮	共通基礎科目	11	共通講義棟 305	後期 月2
	学校カリキュラムのデザインと推進体制（昼間クラス）	1	伊藤 博之 山内 敏男 <u>西本 弘子</u>	専門科目／ 授業実践開発コース	9	共通講義棟 212, 情報5	後期 火3

ベストクラスの選定について

1. ベストクラス選定の目的

ベストクラスは、本学の教育の質の向上のために、よい授業を教職員と学生が共有することを目的に選定されるものである。

2. 選定手続き

①選定は、前年度授業評価結果を参考にし、学生・教職員 F D 活動交流会での検討に基づいて、F D 推進委員会において行われる。

②授業評価の高評価授業科目を対象とし、原則として評価項目の平均値が 3.5 以上のものとする。ただし、選考基準平均値は、評価結果を考慮して設定できるものとする。

③高評価自由記述を検討して、よい授業を 10 程度に絞り込む。その際、授業規模、授業形態、履修年次、科目区分を考慮に入れる。

- ・学校教育学部 81 人以上，80～31 人，30 人以下
- 修士課程 31 人以上，30 人以下
- 専門職学位課程 共通基礎科目，専門科目
- ・講義，演習，実験など

④候補とされた授業の担当教員と受講者（授業担当教員の推薦による）に学生・教職員 F D 活動交流会がインタビューを行い、検討資料とする。

- ・授業者に対しては、授業の意図、当該授業での授業意図の共有度、学生の参画度、当該授業の良さと課題など
- ・受講者に対しては、うけとった授業の意図、参画度、知的刺激、知識の創造など

3. 選定された授業科目の公表方法等

①ベストクラスとして冊子、本学 W e b サイトで紹介する。

内容は

- ・授業名（履修年次，科目区分），開講時期（時限），教室環境，受講者数など
- ・選定理由
- ・授業者の意図と授業の振り返り，授業での工夫点，今後に向けた改善点
- ・受講者の参画度インタビュー，この授業のオススメポイント

②アクティブ・ラーニング研究会での公開授業の候補とする。

以上

令和元年度（前期）授業公開一覧（平成30年度ベストクラス選定科目）

課程	科目名称	授業形態	担当教員 下線は非常勤講師	履修年次	科目区分	令和元年度				
						受講者数 (人)	教 室	開講状況	授業公開日時	
1	学部	学習指導と学校図書館	講義・演習	福原 優子	1～4	教職キャリア科目群／ 教職支援	50	共通講義棟 304	前期 木5	7月11日（木）5限 (16:30～18:00)
※2	大学院 (修士)	障害児医学特論	講義	高野 美由紀	1	専門科目／ 特別支援教育の理論と実 践を学ぶ科目群	34	総合研究棟 大会議室	前期 木2	7月4日（木）2限 授業公開 (10:40～12:10) 授業研究会 (12:15～13:00)
3	大学院 (専門職)	社会心理学に基づく学級経営の 実践開発	講義・演習	竹西 亜古 <u>金綱 知征</u>	2	専門科目／ 生徒指導実践開発コース	11	教育・言語・ 社会棟 526	前期 火2 (一部集中)	6月11日（火）2限 (10:40～12:10)

【備考】※印の科目は、アクティブ・ラーニング研究会（授業公開及び授業研究会）として実施。

令和元年度（後期）授業公開一覧（令和元年度ベストクラス選定科目）

課程	科目名称	授業形態	担当教員	履修 年次	科目区分	令和元年度						
						受講者数 (人)	教 室	開講状況	授業公開日時	科目名称	担当教員	
1	学部	初等音楽科教育法 (Bクラス)	講義・演習	八代 健志	2	教育実践・リフレクション 科目群／初等教科指導法科目	85	芸術棟 100	後期 木2	11月21日(木)2限 (10:40～12:10)	初等音楽科教育法 (Aクラス)	八代 健志
2	学部	教育方法論	講義	安藤 福光	2	教職キャリア科目群／ 教職支援科目	170	共通講義棟 106	後期 火3	12月10日(火)3限 (13:10～14:40)	教育方法論	安藤 福光
3	大学院 (専門 職)	人間的成長を促す 教育の理論と実践A (昼間クラス)	講義・演習	吉水 裕也 大関 達也 平野 亮	1	共通基礎科目	6	共通講義棟 305	後期 月1	1月30日(木)1限 (9:00～10:30)	人間的成長を促す 教育の理論と実践 A／B (昼間クラス)	大関 達也 中間 玲子 平野 亮

授業公開アンケート集計結果 (社会心理学に基づく学級経営の実践開発)

1. 実施状況

日 時：令和元年6月11日（火） 10：40～12：10

場 所：教育・言語・社会棟526

参加者数：11名（教員6名 事務職員 5名）（受講学生除く）

2. 公開授業について

	教 員	職 員
①大変参考になった	4 人	1 人
②参考になった	0 人	0 人
③あまり参考にならなかった	0 人	0 人
④参考にならなかった	0 人	0 人

上記回答理由、その他意見等 （原文ママ）

- ①社会心理学の考え方、今回の公正という考え方、手続き的公正の考え方が、自身が専門とする特別支援教育の考え方にとっても通ずるものであるため、竹西先生のお話からとても参考になるところがありました。授業のポリシーにのっとり、理論と実践の往還のはかりかたとはこういうものかと学ばせていただきました。学生さんの考えが出やすい雰囲気、私自身とても引きこまれて参観させてもらいました。ありがとうございました。
- ②・過去において発言された、考え方や意見等についても、情報提供していただいているので、イメージしやすいと思う。
- ・受講者が発言しやすい環境ができています。
 - ・考え方を学校現場でどのように話していくか非常に参考となると思われるので、現場に浸透させてほしい。
 - ・聞き入るような内容であった。語りかけが上手な先生であった。
- ③・社会心理学の理論を学級経営上の具体的事例を交えつつ、テンポよく話しを進めておられた。院生の理解の助けとなっていた。
- ・教員自身が「理論」をしっかりと把握しているからこそ、わかりやすく伝えられるということを目のあたりにしました。
 - ・ありがとうございました。
 - ・社会心理学の考え方を院生・学生とのかんけいづくりにも生かしたいと思います。
- ④「必要」概念を理解するために学生が自分たちがプレゼンしたことを踏まえて議論する中で、学生が概念を理解していく過程が参考になった。
- ⑤学生さんが主体となって授業に参画している様子を拝見でき、とても興味深かったです。

3. 授業公開に関してその他意見等を自由にご記入ください。

- ①ベストクラスの授業を発信できるような仕組みがあってもいいように思う。1コマの数分でもいい。受講生がアクティブにされている場面がいいと思う。
- ②研究の知見をもとに，教員が丁寧に説明し，学生が自ら学級の現場のことを考えるような展開にされていて参考になりました。
- ③分野を限らず授業をみせていただけなので，とても興味深いです。ありがとうございました。

授業公開アンケート集計結果 (学習指導と学校図書館)

1. 実施状況

日 時：令和元年7月11日（木） 16：30～18：00

場 所：共通講義棟304

参加者数：15名（教員10名 事務職員5名）（受講学生除く）

2. 公開授業について

	教 員
①大変参考になった	5人
②参考になった	4人
③あまり参考にならなかった	0人
④参考にならなかった	0人

上記回答理由、その他意見等 （原文ママ）

【大変参考になった】

- ① ブックトークの体験を学校教育の意義に結びつけて解説していて、学びが深まっていくのだと感じました。
- ② これまでの授業を通して、学生たちとの関係ができており、教員と学生の様子がよかった。学生のブックトークを導入して、どのような話し方や内容を子どもたちに伝えればよいのか主体的に学ばせていた点がよかった。学校図書館司書教諭として学校現場で学生たちもこの授業での学びを生かせると思いました。
- ③ 90分の中で、多様な形態を用いていた。

1. ブックトーク

2. 先生の解説

3. ビデオによる紹介

これらのことについて、プリントに
意見を書かせて集約している。 ⇒ インプット&アウト
プットの両方があった。

情報量が多く、それでいて整理された内容であり、学生の興味関心を常に刺激する内容であった。

【参考になった】

- ① 学生のもりあげ方。学生のブックトークを聞いて、紹介された本を読みたくなったが、そのようなプレゼンができるようになるまでのこれまでの授業の持って来方に関心を持った。
- ② 学生のブックトーク発表がよかった。学校における図書利用の実際についても、具体的に知ることができる内容だった。
- ③ 教員と学生のかかわり方が参考になりました。

- ④ブックトークの演習が実践的で興味深い。そして、その演習に係る学習を通して、理論的にも様々な学びがある。先生の支援も具体的で明確である。(受講者の反応をうまくつないでおられる。)

3. 授業公開に関してその他意見等を自由にご記入ください。

- ① 第13回目の授業として「学習指導における学校図書館の活用」がテーマの内容であった。資料には第5学年の社会科学習指導案があり、具体的な学習指導が学校図書館と結びついているのがわかった。初等社会や初等社会科教育法の授業でも本授業での学びの内容を生かして、学校図書館との連携についても学生たちに考えさせてみたいと思う。授業を参観でき、学生が将来を見据えながら授講していることがよく伝わってきました。
- ② 授業を参観でき、学生が将来を見据えながら授講していることがよく伝わってきました。
- ③ 特にありません。

授業公開アンケート集計結果 (初等音楽科教育法 (Aクラス))

1. 実施状況

日 時：令和元年11月21日（木）10：40～12：10

場 所：芸術棟100

参加者数：12名（教員7名 事務職員5名）（受講学生除く）

2. 公開授業について

	教 員	職 員
①大変参考になった	5人	2人
②参考になった	2人	1人
③あまり参考にならなかった	0人	0人
④参考にならなかった	0人	0人

上記回答理由、その他意見等 （原文ママ）

【大変参考になった】

- ①基礎的な音楽トレーニングから本時の内容に入っていくプロセスはさすがですね。（一つだけ、リズム打ちでの譜面の中で3拍休み1拍打ちのパターンでは、4分休符3つも数え易いですが、2分休符と4分休符1つずつの書き方も、譜面の学習になると思います）「ン」の音を軸とした展開は、創作への導入にもなり、大変参考になりました。（Ⅰ、Ⅲ、Ⅴ、Ⅵ、他多数）の中で展開可能なため。手打ちリレーはもう少し整理した方がよいかもしれませんね。
- ②舞台と客席がとても近い（コミュニケーションが密な）パフォーマンスを観ている感じがした。演出にとっても丁寧に時間をかけ準備されていることが分る。マネをしたいけど役不足かも。楽しかったです。
- ③学生を参加させる工夫、無理させない工夫など、ひきこむ工夫、上手いかなかった教材をすぐに切り替える臨機応変さ。
- ④どのような授業が実際に知れてよかった。授業そのものがリズムカルだった。
- ⑤是非今後に生かしたいと思います。
- ⑥公開授業に参加させて頂き、ありがとうございました。仕事の都合上、前半の30分程しか参加できませんでしたので、大変残念でしたが、その中での感想を書かせて頂きます。私自身が学生の頃に受けた授業や私が保護者として、子供達の授業参観した中でも、最も楽しい授業だったと思います。シェアカードを用いて意見交換し、学生さんの思っている事が私達にも伝わってきましたし、他にも八代先生がいろいろと創意工夫され、それが授業に生かされ先生と学生さんとの距離がとても近いと感じられました。授業は楽しみながら受けるのが一番ですし、先生も熱意を持って授業に取り組まれており、私も授業を受けたくまりました。貴重な機会を頂き、本当にありがとうございました。今後も授業公開はぜひ続けて頂きたいと思います。

【参考になった】

- ①話の内容・話し方の緩急の工夫が随所に見られた。学生を授業の流れに引き込むため、学生に問いかけや実演をうながし、それに対する対応が丁寧であり、きっちりと説明を加えていた。学生が興味をもつ話題を適所に取り入れていた。
- ②・学生の反応に即して、活動内容を入れ替えたり変更したりして、参加意欲を喚起し続けていた。
 - ・ P P を効果的に用いていた。特にリコーダーのブリージング（息づかい）をアニメーションで示していた点が参考になった。
 - ・ 楽譜の提示がなかったことの意図がよくわからなかった。

3. 授業公開に関してその他意見等を自由にご記入ください。

- ① 37年間兵教大に在職中で、最も楽しくかつ有意義な授業でした。先生と学生と一体となっているこの授業がすべからく日本中で行われていたら、音楽を楽しんでいる生徒・学生が急増するでしょう。すばらしい授業方法・内容でした！
- ② 気さくな人柄、何気ない感想にも面白がることのできる感性、学生を乗せることができる進め方など、とても感銘を受けました。
- ③ 学生の前で T A の院生を「助手」と呼んだことにドキッとした。学生の意見によりベストクラスに選定されたことに異論はないが、別の意味で懸念を生じさせるのでは、と感じた。

授業公開アンケート集計結果 (教育方法論)

1. 実施状況

日 時：令和元年12月10日（火）13：10～14：40

場 所：共通講義棟106

参加者数：16名（教員13名 事務職員3名）（受講学生除く）

2. 公開授業について

	教 員
①大変参考になった	10人
②参考になった	3人
③あまり参考にならなかった	0人
④参考にならなかった	0人

上記回答理由、その他意見等（原文ママ）

【大変参考になった】

- ①たいへん親しみやすい語り口で、学生がリラックスして授業に望んでいるのがよくわかりました。本時は学部2年生ということで、具体的な授業スキルの伝達でしたが、15回の授業の前半では「学習指導の原理」に3回を使っておられることから、学生は理論的なことも踏まえて、具体的な方法を理解しているのだろうなと思いました。どうもありがとうございました。
- ②安藤先生が学生に人気があるのがわかった。自分をさらけ出すくらいの身近さがある。エピソードもたくさん加えながら話すので飽きない。人柄といえば、人柄かもしれない。同じ内容でも、人によって伝わるものは異なる。本日の授業内容そのものを感じる語り様だった。「寝る」話をすると、寝ている人が起き出したところは新しい感じがした。
- ③大学生がどういう授業を求めているのかについて色々考えさせられた。空欄資料、エピソードトーク、授業のスピードなど、自分の授業ではあまり取り入れているものであった。この人数での授業でザワザワさせないのはすごい。スマホをみている学生もほとんどいなかった。（メラビアンの法則については、もともとの出典を示してほしいような気はします。）
- ④大人数の授業でも学生をひきつける授業だったと思います。学生たちの顔もよくあがっていました。ノートもポイントをおさえわかりやすく、とても楽しめました。ありがとうございます。
- ⑤授業の中身・内容も参考になるものでした。先生がところどころはさむエピソードが、やはり学生の興味をひきつけ、3限の時間でもきちんときいている人が多いのかなと思いました。ありがとうございました。

- ⑥間の取り方、例の示し方など、学生の取組状況を見て授業されていて、大変参考になった。寝ている学生もあったが、真剣に取り組んでいる学生が大変多かった。学生に授業の仕方の大切なポイントが十分に伝わっていた。
- ⑦レジュメの作り方、授業展開の仕方、ブレイクの作り方など（内容自体も役に立つものでした）
- ⑧豊富な具体例と適度な余談？が学生をひきつけていると思いました。安藤先生の良さがとても出ている授業でした。
- ⑨大人数の授業は簡単ではないと思います。そのような中、場を和ませたり、学生の気をひいたりするための方策が参考になりました。

【参考になった】

- ①学生のひきこみ方や、はなしの進め方など、色々と参考になりました。ありがとうございました。
- ②180人程度の人数、学部生の場合、このようなテンポ、内容が適切ということがわかり、参考になった。

3. 授業公開に関してその他意見等を自由にご記入ください。

- ①両端に教員が並んでやりにくかったことと思います。お疲れ様でした。安藤ゼミに人が集まるわけがわかりました。
- ②もっとたくさん授業をみたいと思っているが、自分の授業と重なることも多い。残念。
- ③講義と重なって授業公開に参加できないことがありました。同じような授業公開を複数回実施して頂ければよいです。
- ④大人数向けの授業をもっと見たいです。
- ⑤ありがとうございました。勉強になりました。
- ⑥他の教員の授業を参観する機会の重要性を再認識できる。

授業公開アンケート集計結果 (人間的成長を促す教育の理論と実践A／B (昼間クラス))

1. 実施状況

日 時：令和2年1月30日（木）9：00～10：30

場 所：共通講義棟305

参加者数：8名（教員4名 事務職員4名）（受講学生除く）

2. 公開授業について

	教 員	事務職員
①大変参考になった	3人	0人
②参考になった	1人	1人
③あまり参考にならなかった	0人	0人
④参考にならなかった	0人	0人

上記回答理由、その他意見等 (原文ママ)

【大変参考になった】

①テキストを学生に主体的に読ませる仕掛け、問い掛けを仕組みながら議論することで、自分ごととして考えさせているところが大変参考になりました。

②知能、資質・能力、OECD-PISA・・・といったことがらについて自分は暗いので、個人的に非常に勉強になったことが、ありがたかったです。

自分の担当している主な授業の要求される内容が少し違うので、ああ、この授業はこんなふうに進めてゆくんだなあと大変参考になりました。（まあ、ぼくには恥ずかしながらムリですが…）「学生さんに『考えて』もらうこと」このことは大事だと自分も思うので今後の授業づくりの中で今日の知見を積極的に活かしてゆきたいです。

大関先生が履修生の人格をととても尊重するすすめ方をしておられたことが印象に残りました。（見ならわねば…）

おだやかに、発言を待っておられて、これが『知性』というものののだろうかあと。

③テキストを読み込もうという授業は大切で、少人数でないとできないものですね。

受講者がストレート院生なので、先生の意図に応えるのが充分ではない部分もあったと思いますが、考えようとする姿勢を感じることができたと思います。議論の進展は興味深い過程でした。

【参考になった】

①・少人数でテキストを基にディスカッションをする方法の一つのあり方を知ることができた。

・自分の授業を受けている同じ学生の、また違った面を見ることができた。

- ②学習者の緊張感のためか、前半はあまり議論にならず、また議論をしても大きな議論になりつつあるなかで、授業担当者が説明等を行うことにより、方向性を元に戻していった。後半は議論も出てきて、いい授業であったと思う。
- 内容としてもおもしろかった。(興味深いものであった。)

3. 授業公開に関してその他意見等を自由にご記入ください。

- ①今後も授業公開をしていただけると、色々な授業を参観できるので、ありがたいです。ご苦労も多いと思いますが、よろしくお願いいたします。
- ②参観者はあまり多くなかったが、公開の回数を増やしていただけると、忙しい先生方も参加できる機会が増えるのではないかと思います。
- ③小中（高校はよく存じませんが）では、お互いの授業を公開して、バンバン批判する文化だったので、大学でも、（みなさんお忙しいのでなかなか時間がとれないともいますが）この公開の機会をつくっておいて頂くのは大変意義があると思います。FDの担当の方々に敬意を表したいです。そして今日の大関先生と履修生のみなさん、緊張なさったでしょうね。すみません、お邪魔して迷惑だったでしょうね。ありがとうございました。

4. アクティブ・ラーニング研究会の実施

第12回兵庫教育大学アクティブ・ラーニング研究会の実施結果について

R1.7.4

目 的 このたびの研究会は、本学学生・教職員を対象として、平成29年度授業科目ベストクラスに選定された授業の1つを公開することによって、授業改善のアイデアや手法等の情報を共有し、本学における教員相互の「授業研究」の場として、個々の教員、及び、大学全体の授業改善を推進することを目的とした。

日時・内容 令和元年7月4日（木） 於：総合研究棟3階 大会議室

①公開授業（授業者：障害科学コース 高野 美由紀 教授）

10:40-12:10 「障害児医学特論」

※修士課程1年次開講，履修者34名

②授業研究会（司会進行：FD推進委員会委員長 松本 剛 教授）

12:15 研究会（学生・教職員との意見交換）

13:00 本日のまとめ，閉会

周知方法

- ・全学生，教職員あてメール通知
- ・学内掲示
- ・関西地区FD連絡協議会に会員校への周知を依頼
- ・大学コンソーシアムひょうご神戸に加盟校への周知を依頼

参加者数 25名

（内訳）教 員 14名

事務職員 5名

学 生 6名（FD活動交流会 参加学生 2名含む）

第13回兵庫教育大学アクティブ・ラーニング研究会の実施結果について

R2. 1. 27

目 的 本研究会は、本学教職員・学生を対象として、アクティブ・ラーニング拡充への取り組みとして実施しているものである。本年度は、院生指導や今後の研究のために要望のあったアクションリサーチについて学外から専門家を招き、大学の授業改善を推進することを目的として実施した。

テ ー マ 「アクションリサーチの魅力と課題」

日時・内容 令和2年1月27日（月） 於：総合研究棟3階 大会議室

13:10 開会・講師紹介

13:20 講演 京都大学防災研究所 教授 矢守 克也 氏

アクションリサーチについて、学校や地域社会などの事例を交えて講演。

14:40 質疑応答

14:45 閉会

周 知 方 法 <学内>

・全教職員・学生あてメール通知及び学内掲示

<学外>

・関西地区FD連絡協議会に会員校への周知を依頼

・大学コンソーシアムひょうご神戸に加盟校への周知を依頼

参 加 者 数 55 名

(内訳) 教 員 20名

事務職員 6名

学 生 24名 (FD活動交流会 参加学生 2名含む)

他大学等 5名

共 催 兵庫教育大学FD推進委員会／学生・教職員FD活動交流会
兵庫教育大学教員養成・研修高度化センター

第 12 回兵庫教育大学アクティブ・ラーニング研究会 アンケート集計結果

実施状況

日 時：令和元年7月4日（木）10：40～13：00
 公開授業　10：40～12：10「障害児医学特論」
 研究会　　12：15～13：00
 場 所：総合研究棟3階 大会議室
 参加者数：25名（教員14名 事務職員5名 学生6名）

1. アンケート回答者数

教員14名 学生5名 合計19名

2. 全体の評価

	教 員	学 生	計
①大変参考になった	8人	2人	10人
②参考になった	3人	3人	6人
③あまり参考にならなかった	0人	0人	0人
④参考にならなかった	0人	0人	0人

3. 公開授業について

	教 員	学 生	計
①大変参考になった	10人	2人	12人
②参考になった	3人	3人	6人
③あまり参考にならなかった	0人	0人	0人
④参考にならなかった	0人	0人	0人

上記回答理由、その他意見等（原文ママ）

①大変参考になった（11件 教員9件・学生2件）

【教員】

- （1）授業の内容を工夫して下さり、バランスのよい展開を見せて頂けた。
- （2）・学校で日常的に起こることについて、医学的な視点をふまえて考えさせてくださるので視野が広がると感じました。
- ・3つのトピックの話し合いについて、どれも学校教育において課題とされていることだと思うが、前時等で記事などをご紹介いただいてグループわけ、議論に至っているので各グループで関心にそって資料を準備したり深めることができていて

- (3) 自分の授業構成を考えなおしたいと思います。
- (4) 大学教員になってまだ5年めの私にとって、先輩方どなたのお授業も勉強になります。ましてやベストクラス授業となれば学ぶところが多いです。高野先生そして履習学生の皆さんありがとうございました。
- (5) レポートの内容に即して専門的な内容が解説されるため、受講者もその内容を受け入れやすくなるのではないかと思います。
- (6) 受講生がディスカッションの準備として論文を調べてきており、それをもとに話し合いができていた。現場におられた先生方も話し合いを身のあるものにしていました。
- (7) ・課題レポートへの取り組み、グループワークの進め方が参考になった。
 ・「医学」というハードルの高いものを理解、活用できるよう配慮し歩み寄っている点。
 ・授業全体で見通しをもたせている点。
 ・自分の授業でグループワークをするので、そのときの進め方、取り組ませ方がわかった。
- (8) 事前の課題提示やふりかえり等、とてもいねいに作られていてとても勉強になりました。具体的な事例を通して考えることの大切さを感じました。ありがとうございました。
- (9) 大変考えさせられる事例、テーマ（思考が促される）、事前に各自が調べたことをシェアする、などをくり返し、レポートの質を高める（思考を深める）手順が何度もあること。

【学生】

- (1) 障害科学コースの授業の実際を初めて見ることができました！
- (2) 各自の作成したレポートに対して丁寧なふり返りを行い、他の受講者の内容をあわせて再度授業でとり上げることによって、知識の定着が行われ、多方向からの考えも取り入れることが可能になると思いました。
 グループ活動も事前にテーマを設定し、話し合いがスムーズにできるように準備がされていたと思います。

②参考になった（6件 教員3件・学生3件）

【教員】

- (1) ・レポートへのフィードバック、共有
 ・資料の説明
 ・グループワーク
- (2) 院生の学びの様子を観察できた点。
 授業者の解説の適確さや準備物の適時性や必然性（現場での切実な必要感）への配慮⇒現場にもどった時に担任としても養護教諭としても役立つ内容。
- (3) アナフィラキシーについて具体的に説明があった。

【学生】

- (1) レポートに対するフィードバックが丁寧で参考になりました。
- (2) フィードバックがよかった。全部すっきりさせない事。
- (3) ふりかえりの部分で学生に考えさせ、フィードバックをしっかりとっておられた点。

4. 授業研究会について

	教 員	学 生	計
①大変参考になった	5 人	3 人	8 人
②参考になった	1 人	2 人	3 人
③あまり参考にならなかった	0 人	0 人	0 人
④参考にならなかった	0 人	0 人	0 人

上記回答理由、その他意見等 （原文ママ）**①大変参考になった（6件 教員4件・学生2件）****【教員】**

- (1) 積極的に意見交換ができた。特にアクティヴ・ラーニングの進め方についてアイデア交換できたことが参考になった。
- (2) 思考するきっかけをいただきました。
- (3) 諸先輩方が、何を企図してどのように導いていこうかと、考えておられるところ（の一端）がペーパーの私にもすごく実感もって学べる会でした。ありがたかったです。
- (4) 授業者と同じコースの先生からの質問が参考になりました。

【学生】

- (1) グループワークを進めるにあたり、議論をどのように共有し、可視化し、内容を深めるのか、とても勉強になりました。
- (2) 講義の組み立て方から話し合いの進め方など、たくさん情報をいただきました。グループワークに対して先生方も難しく感じられていらっしやって、様々な工夫をされていること、参考になりました。ありがとうございました。

②参考になった（3件 教員1件・学生2件）**【教員】**

- (1) 高野先生のお考えを確認できたこと。

【学生】

- (1) グループワークについてお話をいただけた事がよかった。
- (2) 授業のふりかえりとまた新たな授業の進め方等が紹介され、勉強になりました。

5. その他自由意見など

【教員】

- (1) 主体的な学びとかアクティヴなラーニングとかの学びは外形としてのそれを言うのではなく、学習者が意欲を持って興味関心の赴くまま「自らの課題として」活動していけば良いとは思っていますが、このような研究会を通していろいろ深められてうれしくありがたかったです。
- (2) 学生の様子を見れた点が、個人的には有意義でした。講義中に質疑応答を導入するアイデアは今後導入してみようと思います。

【学生】

- (1) よい取組みです。
- (2) 兵教大のFD活動に参加することができて幸せです。今後ともよろしくお願い致します。

第 13 回兵庫教育大学アクティブ・ラーニング研究会 アンケート集計結果

1. 実施状況

日 時：令和2年1月27日（月）13：10～14：45

場 所：総合研究棟3階 大会議室

参加者数：55名（教員20名 事務職員6名 学生24名 他大学等5名）

2. アンケート回答者数

43名（教員17名 事務職員1名 学生22名 他大学等3名）

3. 講演について

	教 員	事務職員	学 生	他大学等	計
① 大変参考になった	12人	1人	15人	2人	30人
② 参考になった	5人	0人	7人	1人	13人
③ あまり参考にならなかった	0人	0人	0人	0人	0人
④ 参考にならなかった	0人	0人	0人	0人	0人

上記回答理由、その他意見等（原文ママ）

① 大変参考になった（28件 教員12件・事務職員1件・学生14件・他大学等1件）

【教員】

- （1）アクションリサーチは“態度”であるという視点は今後の標となるものでした。
アクションリサーチ的な態度を保ちながら現場で実践していきたいと思います。
- （2）学校の取り組みが、いつもひとりよがりなものに終わっている感覚があります。
このような10年という日々の積み重ねの中でこそ生まれるダイナミックな教育の魅力を改めて感じました。研究とは何か？実践とは何か？という小手先のデータづくりにとどまらない、人づくり、街づくりに関与できる教師になりたいと思いました。
- （3）知らないことばかりでとても参考になりました。10年かかると言われましたが、研究につなぐ研究にする続編もあるといいと思いました。
- （4）新しい知識を得ることができたし、きちんと教育と関連づけた内容を用意していただいたので大変よかった。
- （5）研究についての姿勢をもう一度考えさせられるお話しでした。
全体に流れていた“本当に役に立つ研究”という感覚が大変良かったです。
- （6）とてもおもしろい講義でした。
理論、実践、その評価についてくわしく教えていただきました。
ありがとうございました。

- (7) アクションリサーチの本質がとても理解でき、ありがたい機会をいただきました。
なんのために研究するのかを改めて考えさせられました。
学校現場で起こっていることや求められていることに学校と共に課題解決に向き合っていきたいと思いました。
研究者としての姿勢を見つめなおす貴重な機会を本当にありがとうございました。
- (8) 「逃げトレ」、学校の職員にも宣伝します。リアルで、こわかったです。
- ①防災教育
現場では、急に校務分掌で防災担当になることがある。
しかし、防災教育には特にテキストがないので、何をすればよいか困ることがある。
- ②研究
研究の継続の大切さ。研究テーマをコロコロ変えずに、その学校で売りとなる、柱となる研究を見つけない。
- (9) アクションリサーチの定義について、講演以前に知っていた内容より異なっていたことに自分自身驚きました。
また具体的な例を、とくに防災から話しをしていただいたので、わかりやすかったです。
防災に関する部分はとくに参考になりました。
- (10) 矢守先生、本日はお忙しい所貴重なお話を誠にありがとうございました。自然科学対社会科学、心理学の限界についてのお話、大変興味深かったです。
- (11) リサーチの仕方、現地との関係など、興味を持った。研究者としてとても刺激を受けた。
逃げトレアプリがとにかくおもしろそうだし、そこまでの精選過程なども知りたかったと思った。
- (12) ・アクションリサーチについて理解が深まった。
・研究への「かまえ」について、アイデアをいただいた。

【事務職員】

- (1) アクションリサーチ以外の防災、減災についても大変おもしろ勉強になった。

【学生】

- (1) 避難訓練の問題意識に私も感じておりました。
判定という考えを私は持っていなかったので実践に取り入れたいと思いました。
- (2) 「アクションリサーチ」という自分にとってなんとなくわかるような、わからないことと、「防災」という現在自分が学校現場で大きな課題と思っている2つのことをきかせていただけて大変勉強になりました。私自身神戸市で震災にあい、他の地域に移って地域の意識（危機管理）の低さに、発信しても受信してもらえず、自信をなくしたり、悩んでいる時だったので、これからもっと考えて、生徒や先生、地域の方と意識していけるように考えていこうと思いました。どうも

ありがとうございました。

- (3) 私自身の修士論文で防災教育を取り入れた授業を研究していたのもあり、とても参考になりました。

また教育現場だけでなく、行政、地域、研究者それぞれが、共同実践をすることが大切だということを学ぶことができ、とても良かったと思います。

- (4) 教育関係の用語が、流行にのってひとり歩きしている状態と昨今の論文や業界のうごき、授業の様子から感じていたところでした。長いスパンでとりくむことの必要性や多面的な視点（あらゆる人の立場）、シビアな話、お金も必要。カンタンなことではないと感じ、もっと自分の研究を深めるとともに、この領域との関わりを考えたいと思いました。

- (5) 防災訓練を学生時代に受けた時に私も周りもへラへラしていたのを思い出しました。

本当に意味のある防災というのは人の意識を変えることであると思いました。自分では変えることが難しいものでも、人との関わりによって意識を変えることが可能なのですね。

- (6) 教職大学院の現職の学生ですが、研究する側としての今の立ち位置に迷うところがあったのですが、私も研究結果を出すための研究にならないよう、学校現場で本当に役立つものをつくれればいいのだと思いました。

防災の内容も、学校で行っている避難訓練を意味あるものにするために役立てたいと思いました。

- (7) 研究の対象（当事者）がして欲しいことを研究者のできることと合わせながらやっていく大切さを再認識しました。

- (8) 教職大学院の院生として、来年度から実習に行くにあたり、アクションリサーチの視点は大変大切なものになると感じました。

- (9) 私は、修士論文で防災教育について書いたので、矢守先生の論文や書籍、今日のお話で、続けていくことの大切さと重要性がわかりました。ありがとうございました。

- (10) 新たな視点と思考を学べました。訓練の目的も、そもそもが大きくなりすぎていると気づきました。

- (11) 姿勢としてのアクション・リサーチを理解した。

現場の実践は、変化をおこして、より良いものが生まれているが、記録がなければ、自然に自発的に起こったものとされる。

実践者として、それでもいいかと思っていた。が姿勢として持ち続けていくことは、実践者としての矜持でもあると、あらためて思わされた。お話を聞けてとても良かった。矢守先生に感謝する。

- (12) ・アクションリサーチとはどういうものなのかがとてもよく分かった。

・評価の仕方について、自分の研究ではどのようなことをするとよいのか様々なヒントをもらうことができた。

・現場とどのように研究を進めていくとよいのかやりたいことが見えてきた。ありがとうございました。

(13) 聞きに来て良かったです。

4月から現場にもどるのですが、勇気を得ました。

充実した人生を作るのに少しでも役立つような教科教育指導をめざしたいと思っています。ありがとうございました。

(14) アクション・リサーチの特ちょうについてよく分かった。

防災・減災と特定の分野を例として出して頂いたのでよりイメージしやすかったです。

【他大学等】

(1) 現場での実践的な研究をベースにとっても具体的なお話でした。

アクション・リサーチという考え方を詳しく、体系的に知ることができ、これからの活動の手法としてとても参考になりました。このような視点での現場とのかかわり方をもっと意識的に行う必要性を強く考えさせられました。

また、本日お聞きした考え方は研究者だけでなく、行政担当者にも重要な視点だと思います。

② 参考になった（12件 教員4件・学生7件・他大学等1件）

【教員】

(1) 今まで捉えていたアクションリサーチの捉え直しができたように思う。

(2) アクティブ・ラーニング研究会というよりも「アクション・リサーチ」に魅かれて参加しました。私自身も体育・スポーツ領域でずっと意識してきてますが（るつもりですが）、大変勉強になりました。

短期的なプレ・ポストの捉えについての批判は痛快でした！

(3) アクションリサーチへの誤解ありました。勉強します。

(4) 効果測定に関する話題が興味深かった。

↓

教育実践の効果をどのように測定し、示せばよいのか？

【学生】

(1) ○・現場で生徒をずっと観察してきた事

・1つの科目を20年以上教え、教科書の書かれ方のわずかな変化を察知してきた事。

・生徒相手に試行錯誤して、手応えを感じてきた事

そのような現場の視点を、大学院で消し去ってしまうのではなく、現場で感じてきた視点を充分生かして、自分なりの研究をしたいと感じた。

○「逃げトレ」を太平洋岸に出かけた時にぜひ使ってみたいと感じた。

(2) 防災訓練の研究をもとに観察者、観察される者との関係について理解を深めることができた。

また、取り組みを評価する際、直後の気持ちや知識の変化だけをもとに検証す

るだけで良いのか？プレ・ポストテストだけの評価で良いのか？10年後に見られた行動の変化，文化などの評価の方が本当に効果検証になるのではないかというなげかけが，自己の今後の研究の示唆を得られた。

- (3) アクションリサーチの本は1～2冊しか読んでいないので，十分理解できたかどうかは自信がない。しかし，避難手順，方法だけ知っても動けない。私の母は86才で電話に出るだけでも1分近くかかる。1人ぐらしの母のもしもの時の避難に対する思いを考えると涙が出そうになった。その現場の中に実際に入って，人の心に触れなくては，変わらないと思う。

寅さんの「人間は理屈じゃ動かねえんだよ！」である。

- (4) アクションリサーチの本質だけでなく，防災教育実践のヒントも学び得ることができました。

- (5) ・アクションリサーチという考え方があることを知ることができて良かったです。教育研究では，プレポストテストでは部分的な結果は出るかもしれないけれど，総合的に見ることの大切さ，長期的な視点で見ることの大切さについて考える機会となってよかったです。

- (6) データから見えてくる傾向もあり，しかし短期間での結果に喜ぶことに疑問あり，ゆえにどちらも大切だと思いました。

アクションリサーチは，研究者と対象者との関係性につけるのかなと思いました。

- (7) 防災の事例を通しての説明で，アクションリサーチについてのイメージをもつことができました。

現場における教育活動においても，アクションリサーチの構えをもってよりよい実践を目指して取り組んでいきたいと思いました。

【他大学等】

- (1) 当事者の必要・求めるものに研究者が出来ることは一致しない。当時者の必要に寄り添いながら，研究に反映させていかなければならない難しさを感じました。継続は力なり。

4. 今後取り扱ってほしいテーマを含め，その他意見等 (原文ママ)

【教員】

- (1) 今後，教員には，今回のような防災に関する知識や実践は必須であると思うので，今回のような講演はぜひ続けてほしい。
- (2) 本日はありがとうございました。
- 日本の学校に在学する外国にルーツを持つ子どもたちをとりまく教育研究課題をテーマにしていきたいです。
- (3) アクション・リサーチの教育版実践みたいなものを取り上げて，全学教員に聞かせるべしと思います。

【学生】

- (1) 大学の授業のあり方について

(2) グローバル教育の実践について

(3) プレ・ポストテストじゃないですが、大学での各期の授業評価アンケートも、正直、あまり信憑性ないよなぁ・・・と思っています。

「暴言に共感」…!?ならば我々はもっと、短期的なエビデンスを求める今の風潮を批判しなければならないのではないのでしょうか。いえ、自戒も込めて。

(4) 特別支援教育における「学びの多様性」と「アクティブラーニング」について学びを深めてみたい。

(5) グローバル・シティズンシップ育成に関する実践に関わる内容

【他大学等】

(1) 学外の関係者にもこのような機会を与えていただき感謝します。

5. アクティブ・ラーニング実施状況についての調査報告（平成30年度実施）

本学におけるアクティブ・ラーニング実施状況についての調査報告（平成30年度実施）

1 調査の目的

アクティブ・ラーニングの要素をもつ授業が、本学でどの程度実施されているのかを把握することを目的として、FD推進委員会のもとでWeb調査を実施した。この調査は、平成30年度年度計画02、05で示された「アクティブ・ラーニング等の授業形態や授業方法の拡充に取り組む。」に基づいてなされたものであり、平成28年度に実施した調査と同様の内容、方法により実施した。

2 調査方法

Web調査により、各教員に平成30年度の主担当授業科目について回答するよう求めた。

3 調査期間

平成31年1月31日（木）～2月21日（水）

4 調査対象

本学専任の授業担当教員を調査対象とした。回答数は、学部143科目、修士95科目、専門職65科目の計303科目である。回答率は43.3%であった。

5 結果

（1）項目別集計

11の質問項目を設け、それぞれについて、「はい」、「いいえ」で回答を求めた。集計結果は、表1に示す通りである。「1. 聴く以上の関わり」は9割以上の授業でなされており、「5. 活動する過程で書いたり、話したり、発表する」こと、「9. 対話的な学び」、「3. 高次の思考」、「4. 授業の中での活動」は8割以上の授業でなされている。「11. 学習活動を振り返り次につなげる」こと、「7. 問題発見・解決ができるような授業」、「2. スキル育成」は7割以上の授業でなされている。「8. 他者と協同する課題の設定」、「10. 見通しを持って粘り強く取り組めるようにすること」、「6. 自身の価値観の探究」が6割以上である。全体的な傾向として、2016年度と比較して顕著な差は認められなかった。

表1 項目別集計

質問項目	はい			いいえ		
	2018		2016	2018		2016
	件数	%	%	件数	%	%
1. 学生に聴く以上の関わりをすることを求めている。	280	92.4	94.7	23	7.6	5.3
2. 情報伝達よりも学生のスキル育成に重きを置いている。	220	72.6	68.2	83	27.4	31.8
3. 学生に高次の思考（分析，総合，評価）を促すようにしている。	251	82.8	81.8	52	17.2	18.2
4. 学生が活動する授業をしている。	246	81.2	82.1	57	18.8	17.9
5. 学生が活動する過程で考えたことを，書いたり，話したり，発表したりする授業をしている。	256	84.5	83.1	47	15.5	16.9
6. 学生が自分自身の態度や価値観を探究することに重きを置いている。	202	66.7	65.7	101	33.3	34.3
7. 学生が問題発見・解決できるような授業にしている。	232	76.6	78.5	71	23.4	21.5
8. 学生が他者と協働する課題を設けている。	210	69.3	62.9	93	30.7	37.1
9. 学生が自らの考えを広げ深める対話的な学びができるようにしている。	255	84.2	80.6	48	15.8	19.4
10. 学生が見通しを持って粘り強く取組めるようにしている。	210	69.3	69.2	93	30.7	30.8
11. 学生が自らの学習活動を振り返り次につなげられるようにしている。	242	79.9	79.5	61	20.1	20.5

(2) 授業属性別にみた違い

表2-1 から表2-3 は、授業規模、授業区分、授業方法別に、質問項目に対する回答を集計したものである。

授業規模別（表2-1）で見ると、概して授業規模の小さい30以下のクラスで、「1. 聴く以上の関わり」や「9. 対話的な学び」、「5. 活動する過程で書いたり、話したり、発表すること」がなされていると言える。肯定率の平均値を算出してみると、「～30人」と「31～81人」ではそれぞれ、78.6%、78.9%とほぼ同じであり、69.3%の「81人～」に比べて高い。「81人～」の肯定率の平均値は他の2群に比べれば低いですが、2016年度に比べると大きく上昇している。また、「81人～」において、2016年度には肯定率が50%に満たない項目もあったが、2018年度になると、そのような項目は一つもなかった。

学部・修士・専門職という授業区分別（表2-2）で見ると、専門職学位課程の授業の中で、「1. 聴く以上の関わり」、「9. 対話的な学び」、「5. 活動する過程で書いたり、話したり、発表すること」、「4. 授業の中での活動」、「8. 他者と協働する課題の設定」、「11. 学習活動を振り返り次につなげること」がより多くなされていると言える。肯定率の平均値は、「学部」「修士」「専門職」の順で高くなる傾向が認められ、この傾向は2016年度と同様だが、その差は大きなものではなかった。授業区分ごとの肯定率の差の平均値を算出してみると、「学部」で-0.6%、「修士」で3.3%、「専門職」で-2.2%であった。

授業方法別（表2-3）で見ると、演習では、「1. 聴く以上の関わり」、「4. 授業の中での活動」、「5. 活動する過程で書いたり、話したり、発表すること」、「9. 対話的な学び」、の実施率が高く、実験・

実習・実技では、「4. 授業の中での活動」、「7. 問題発見・解決」の実施率が高い。また、算出した肯定率の平均値と標準偏差から次のような結果が示唆される。まず、2018 年度の結果について、「演習」「講義・演習」「実験・実習・実技」では、85%以上の授業で項目に示された内容が展開されていることが示された。しかし、「講義」の肯定率の平均値は、他の3群より低く、60%程度に留まっていた。肯定率の標準偏差をみてみると、「講義」「演習」「講義・演習」で概ね小さくなる傾向が認められたのに対し、「実験・実習・実技」では大きくなる傾向にあった。

表2－1 授業規模別集計

質問項目	授業規模								
	～30人			31～80人			81人～		
	2018		2016	2018		2016	2018		2016
	件数	%	%	件数	%	%	件数	%	%
1. 学生に聴く以上の関わりをすることを求めている。	225	93.4	97.0	42	91.3	90.8	13	81.3	68.8
2. 情報伝達よりも学生のスキル育成に重きを置いている。	179	74.3	72.4	31	67.4	59.2	10	62.5	31.3
3. 学生に高次の思考（分析，総合，評価）を促すようにしている。	199	82.6	82.2	39	84.8	84.2	13	81.3	62.5
4. 学生が活動する授業をしている。	198	82.2	85.9	37	80.4	76.3	11	68.8	37.5
5. 学生が活動する過程で考えたことを，書いたり，話したり，発表したりする授業をしている。	204	84.6	85.6	39	84.8	77.6	13	81.3	56.3
6. 学生が自分自身の態度や価値観を探究することに重きを置いている。	164	68.0	65.8	29	63.0	71.1	9	56.3	37.5
7. 学生が問題発見・解決できるような授業にしている。	181	75.1	78.6	40	87.0	80.3	11	68.8	68.8
8. 学生が他者と協働する課題を設けている。	165	68.5	62.8	36	78.3	69.7	9	56.3	31.3
9. 学生が自らの考えを広げ深める対話的な学びができるようにしている。	208	86.3	84.2	37	80.4	73.7	10	62.5	43.8
10. 学生が見通しを持って粘り強く取組めるようにしている。	167	69.3	72.4	34	73.9	61.8	9	56.3	43.8
11. 学生が自らの学習活動を振り返り次につなげられるようにしている。	193	80.1	80.9	35	76.1	77.6	14	87.5	62.5

表2－2 授業区分別集計

質問項目	授業区分								
	学部			修士			専門職		
	2018		2016	2018		2016	2018		2016
	件数	%	%	件数	%	%	件数	%	%
1. 学生に聴く以上の関わりをすることを求めている。	132	92.3	92.4	87	91.6	95.8	61	93.8	100.0
2. 情報伝達よりも学生のスキル育成に重きを置いている。	103	72.0	69.2	64	67.4	62.7	53	81.5	78.6
3. 学生に高次の思考（分析，総合，評価）を促すようにしている。	113	79.0	77.8	82	86.3	82.4	56	86.2	94.6
4. 学生が活動する授業をしている。	110	76.9	80.3	77	81.1	80.3	59	90.8	92.9
5. 学生が活動する過程で考えたことを，書いたり，話したり，発表したりする授業をしている。	118	82.5	81.8	78	82.1	80.3	60	92.3	94.6
6. 学生が自分自身の態度や価値観を探究することに重きを置いている。	78	54.5	56.1	70	73.7	71.8	54	83.1	83.9
7. 学生が問題発見・解決できるような授業にしている。	108	75.5	77.3	75	78.9	77.5	49	75.4	85.7
8. 学生が他者と協働する課題を設けている。	90	62.9	64.6	63	66.3	53.5	57	87.7	80.4
9. 学生が自らの考えを広げ深める対話的な学びができるようにしている。	109	76.2	75.8	85	89.5	82.4	61	93.8	92.9
10. 学生が見通しを持って粘り強く取組めるようにしている。	91	63.6	69.2	74	77.9	69.7	45	69.2	67.9
11. 学生が自らの学習活動を振り返り次につなげられるようにしている。	109	76.2	73.7	76	80.0	81.7	57	87.7	94.6

表2-3 授業方法別集計

質問項目		授業方法											
		講義			演習			講義・演習			実験・実習・実技		
		2018		2016	2018		2016	2018		2016	2018		2016
		件数	%	%	件数	%	%	件数	%	%	件数	%	%
1.	学生に聴く以上の関わりをすることを求めている。	90	82.6	90.2	57	100.0	96.0	115	97.5	98.5	18	94.7	95.7
2.	情報伝達よりも学生のスキル育成に重きを置いている。	57	52.3	39.9	52	91.2	98.0	94	79.7	72.3	17	89.5	91.3
3.	学生に高次の思考（分析，総合，評価）を促すようにしている。	76	69.7	81.8	52	91.2	82.0	107	90.7	81.5	16	84.2	82.6
4.	学生が活動する授業をしている。	71	65.1	60.8	56	98.2	98.0	100	84.7	90.8	19	100.0	95.7
5.	学生が活動する過程で考えたことを，書いたり，話したり，発表したりする授業をしている。	71	65.1	66.4	55	96.5	95.0	112	94.9	91.5	18	94.7	87.0
6.	学生が自分自身の態度や価値観を探究することに重きを置いている。	59	54.1	62.2	41	71.9	70.0	88	74.6	63.8	14	73.7	78.3
7.	学生が問題発見・解決できるような授業にしている。	65	59.6	69.2	51	89.5	83.0	97	82.2	82.3	19	100.0	95.7
8.	学生が他者と協働する課題を設けている。	56	51.4	49.0	45	78.9	78.0	96	81.4	63.8	13	68.4	78.3
9.	学生が自らの考えを広げ深める対話的な学びができるようにしている。	74	67.9	67.1	54	94.7	87.0	112	94.9	88.5	15	78.9	91.3
10.	学生が見通しを持って粘り強く取り組めるようにしている。	56	51.4	62.9	42	73.7	72.0	94	79.7	70.0	18	94.7	91.3
11.	学生が自らの学習活動を振り返り次につなげられるようにしている。	75	68.8	74.8	46	80.7	85.0	103	87.3	78.5	18	94.7	91.3

(3) 授業に取り入れている形態と今後取り入れたい形態

表3-1 から表3-3 は、現在授業に取り入れているアクティブ・ラーニングの形態を尋ねたものである。

授業規模別（表3-1）で見ると、取り入れられている形態は、項目によって大きく異なる。たとえば、「振り返り」「グループワーク」は、授業規模にかかわらず比較的に取り入れられている。「学生によるプレゼンテーション」は、「～30人」「31～80人」ではわりと取り入れられているものの、「81人～」になると、その割合はかなり低下する。こうした傾向は、2016年度にもみられたものであり、2016年度からの肯定率の差を算出してみると、いずれの授業規模においても「PBL」の低下傾向が目立つ（「～30人」で-14.6ポイント、「31～80人」で-16.8ポイント、「81人～」で-12.5ポイント）。

授業区分別（表3-2）で見ると、「グループワーク」「学生によるプレゼンテーション」「振り返り」は、授業区分にかかわらず比較的に取り入れられている。この傾向は2016年度から変化していない。ただしその割合は、「専門職」で70%を超え、「学部」「修士」を大きく上回っている。2018年度は、「反転授業」を除くすべての項目において、「学部」「修士」よりも「専門職」のほうが取り入れられている割合が高い。2016年度との差を算出してみると、授業区分にかかわらず、「PBL」の低下が著しい（「学部」で-16.4ポイント、「修士」で-12.3ポイント、「専門職」で-22.1ポイント）。

授業方法別（表3-3）で見ると、「グループワーク」「学生によるプレゼンテーション」「振り返り」は、授業方法にかかわらず、他の項目に比べて取り入れられている割合が高い。この傾向は2016年

度とほぼ同じである。2016年度からの変化については、「演習」で「ディベート」の割合が増加。
「演習」「実験・実習・実技」において「PBL」の低下が目立つ（「演習」で-24.0ポイント、「実験・実習・実技」で-46.9ポイント）。

表3-1 現在、授業に取り入れている形態（授業規模別）

形態		授業規模								
		～30人			31～80人			81人～		
		2018		2016	2018		2016	2018		2016
		件数	%	%	件数	%	%	件数	%	%
1.	反転授業	14	5.8	6.6	4	8.7	6.6	1	6.3	0.0
2.	P B L	17	7.1	21.7	2	4.3	21.1	0	0.0	12.5
3.	グループワーク	148	61.4	53.3	36	78.3	64.5	7	43.8	31.3
4.	ロールプレイ	41	17.0	14.5	11	23.9	11.8	1	6.3	6.3
5.	ディベート	45	18.7	15.1	5	10.9	9.2	0	0.0	6.3
6.	フィールドワーク	25	10.4	9.9	2	4.3	1.3	0	0.0	0.0
7.	学生によるプレゼンテーション	159	66.0	58.2	26	56.5	36.8	2	12.5	6.3
8.	振り返り	132	54.8	46.1	29	63.0	60.5	11	68.8	56.3
9.	その他	16	6.6	10.5	2	4.3	6.6	1	6.3	6.3

表3-2 現在、授業に取り入れている形態（授業区分別）

形態		授業区分								
		学部			修士			専門職		
		2018		2016	2018		2016	2018		2016
		件数	%	%	件数	%	%	件数	%	%
1.	反転授業	9	6.3	5.1	6	6.3	6.3	4	6.2	10.7
2.	P B L	4	2.8	19.2	5	5.3	17.6	10	15.4	37.5
3.	グループワーク	81	56.6	54.0	53	55.8	48.6	57	87.7	71.4
4.	ロールプレイ	23	16.1	15.2	14	14.7	12.7	16	24.6	10.7
5.	ディベート	15	10.5	10.1	19	20.0	13.4	16	24.6	26.8
6.	フィールドワーク	8	5.6	4.0	7	7.4	10.6	12	18.5	14.3
7.	学生によるプレゼンテーション	80	55.9	51.0	57	60.0	45.8	50	76.9	71.4
8.	振り返り	78	54.5	46	47	49.5	43.7	47	72.3	75
9.	その他	7	4.9	8.6	6	6.3	10.6	6	9.2	10.7

表3-3 現在、授業に取り入れている形態（授業方法別）

形態		授業方法											
		講義			演習			講義・演習			実験・実習・実技		
		2018		2016	2018		2016	2018		2016	2018		2016
		件数	%	%	件数	%	%	件数	%	%	件数	%	%
1.	反転授業	9	8.3	7.0	2	3.5	6.0	7	5.9	6.9	1	5.3	0.0
2.	P B L	9	8.3	11.2	4	7.0	31.0	5	4.2	19.2	1	5.3	52.2
3.	グループワーク	55	50.5	42.0	39	68.4	69.0	87	73.7	56.2	10	52.6	60.9
4.	ロールプレイ	8	7.3	8.4	17	29.8	26.0	26	22.0	10.8	2	10.5	8.7
5.	ディベート	19	17.4	11.2	22	38.6	18.0	8	6.8	11.5	1	5.3	21.7
6.	フィールドワーク	6	5.5	7.7	7	12.3	11.0	13	11.0	6.2	1	5.3	4.3
7.	学生によるプレゼンテーション	47	43.1	31.5	47	82.5	70.0	82	69.5	56.9	11	57.9	73.9
8.	振り返り	54	49.5	49	32	56.1	52.0	76	64.4	47.7	10	52.6	47.8
9.	その他	4	3.7	2.8	2	3.5	19.0	13	11.0	10.8	0	0.0	4.3

表4-1から表4-3は、今後授業に取り入れたいアクティブ・ラーニングの形態を示したものである。全体としては、「2. P B L」という回答が全体の56科目からあがっており、2016年度同様、Problem/Project-Based Learningに期待する向きがある。

授業規模別（表4-1）で見ると、2016年度と2018年度で結果に違いが認められる。2016年度では、「～30人」で「PBL」と「ディベート」が、「31～80人」で「PBL」が、「81人～」で「反転授業」「その他」が、それぞれ選択される傾向にあった。ところが、2018年度になると、その傾向は認められなくなり、授業規模にかかわらず「反転授業」「PBL」「ディベート」が選択されている。

授業区分別（表4-2）で見ると、2018年度において、「学部」「修士」よりも「専門職」のほうが、ほとんどすべての項目で選択する割合が高い傾向にあった。2016年度から変化した点として、「PBL」を選択した割合が「学部」「修士」では減少した一方で「専門職」では上昇した。

授業方法別（表4-3）で見ると、2018年度において、授業方法によって選択される項目が異なる傾向にあった。たとえば、「講義」では「PBL」と「ディベート」が、「演習」では「PBL」と「反転授業」が、「講義・演習」では「PBL」が、「実験・実習・実技」では「反転授業」が、比較的に選択されていた。その傾向は、「講義」「講義・演習」「実験・実習・実技」では2016年度においてもみられたものだが、「演習」ではやや様相を異にしていた。

表4-1 今後、取り入れたい形態（授業規模別）

形態		授業規模								
		～30人			31～80人			81人～		
		2018		2016	2018		2016	2018		2016
		件数	%	%	件数	%	%	件数	%	%
1.	反転授業	30	12.4	7.6	8	17.4	2.8	2	12.5	19.6
2.	P B L	45	18.7	18.1	9	19.6	31.6	2	12.5	0.0
3.	ロールプレイ	11	4.6	7.6	4	8.7	5.3	0	0.0	0.0
4.	ディベート	28	11.6	12.2	6	13.0	10.5	2	12.5	6.3
5.	その他	3	1.2	0.7	0	0.0	5.3	0	0.0	18.8

表4-2 今後、取り入れたい形態（授業区分別）

形態		授業区分								
		学部			修士			専門職		
		2018		2016	2018		2016	2018		2016
		件数	%	%	件数	%	%	件数	%	%
1.	反転授業	17	11.9	7.6	13	13.7	2.8	10	15.4	19.6
2.	P B L	22	15.4	21.7	11	11.6	16.2	23	35.4	25.0
3.	ロールプレイ	5	3.5	8.1	4	4.2	4.9	6	9.2	7.1
4.	ディベート	12	8.4	10.1	11	11.6	9.9	13	20.0	21.4
5.	その他	1	0.7	1.5	1	1.1	1.4	1	1.5	7.1

表4-3 今後、取り入れたい形態（授業方法別）

形態		授業方法											
		講義			演習			講義・演習			実験・実習・実技		
		2018		2016	2018		2016	2018		2016	2018		2016
		件数	%	%	件数	%	%	件数	%	%	件数	%	%
1.	反転授業	14	12.8	4.9	11	19.3	8.0	9	7.6	9.2	6	31.6	13.0
2.	P B L	21	19.3	22.4	14	24.6	21.0	20	16.9	20.8	1	5.3	0.0
3.	ロールプレイ	8	7.3	4.2	4	7.0	13.0	3	2.5	6.2	0	0.0	0.0
4.	ディベート	20	18.3	10.5	5	8.8	23.0	9	7.6	5.4	2	10.5	4.3
5.	その他	0	0.0	2.8	1	1.8	1.0	2	1.7	3.1	0	0.0	0.0

6. 授業改善の具体的指針

授業改善の具体的指針

－ 学生による授業評価から見た良い授業とは －

平成 26 年度から平成 30 年度までの授業評価のうち、学生による授業評価（項目 2 頁）が 3.5 以上の授業科目について、記載された高評価自由記述を分析した結果（3 頁以降に詳述）、次の諸点が授業改善のポイントとして導出された。

1. わかりやすさの構造

受講生は

、理解したい、わかりたいという思いを持ち授業に臨んでいる。したがって、まず、この思いを受けとめることが必要になるであろう。

わかることを支える要素としては、授業の目的・目標が明確であること、授業構成がよく練られていること、説明が的確であること、具体的な事例を用いて説明がなされることがあげられる。教員からのフィードバックがあること、体験型ワークやグループワークなど受講生同士の相互交流が適度に配置されていることも、授業をより理解しやすくなる配慮として有効である。本学の特徴として学生が求めている配慮事項としては、汎用性や学校が抱える課題などが具体的にイメージできるような内容、学生が既存の知識と授業の内容に関連づけがなされることがあげられる。授業のテンポや提示される資料や教材・板書を充実させることにより、「学び方を学ぶ」ことができるなど聴き手の学びを促進できるような配慮がなされている授業は学生の評価が高い。

一方で、学生からの要望とは反対の内容になるとも思われるが、わかりやすい、わかるということに、学生が安住することに対する危惧もある。学ぶという行為には、わからないことをわかるようにする「自主的に学ぶ」という行為や、「自分一人で知を開拓していく」ような取組の要素が求められる。わからないというある種欠乏状態に身を置くことによって、わかることへの可能性が開かれることもまた大切である。常に、わかりやすい授業に配慮した授業が展開されると、学生は知を提供してもらうのが当然であるといった思い込み、自らの手で知識を創り出すことに億劫になるというパラドックスが生じることにもなる。学生のニーズに配慮しながら、時には問題提起に留めるなど、学生が自主的に学ぶという行為にも配慮された授業構成が望まれるところであろう。

また、予習内容をもとにしたディスカッションや、授業で得た知や技法を授業後に学生間で再吟味することなど、授業前後も含めた学びの深化の促進についても、その必要性がより高まっている。これらの授業へのさまざまな配慮は、学生の「自明性への懐疑」や「省察性の向上」「知的興奮」といった学生の成長を促すことにもつながっていくものと考えられる。

2. 感動を作り出す授業

良い授業は、ある種の感動を生み出す。授業において、学問の体系性を見出したり、その多様性（多面性）にふれたりすること、授業を通じてなされる思考の促進や気づき、発見などがその要素として求められている。一方本学では、理論と実践の融合や具体性、学

校現場での応用可能な知の構築への期待も高い。

教員の説明の的確さやわかりやすさ、用いられる資料の質、一方的でなく受講者の五感を刺激するような工夫といった授業の構成要素、授業中での相互性（学びあい）や協同性といった授業の形態にも留意することが必要である。これらの授業への配慮は、学生に「楽しかった」「面白かった」といった感覚を学生に喚起し、ひいては学生の意欲の喚起や意識の変化が生まれる素地となるものと考えられる。

3. 授業統括者としての教員の役割

教員は、授業における教授行為に加えて、今後さらに求められる学生間の相互交流などを通じた教育活動から得られる発見や気づき、省察の機会をどのように形成していくことができるかが問われている。その際には、人権に配慮された発言や、演習に際して学生に極度な無理強いをしないことなど、授業を通じて学生に対するハラスメント行為が生じないような授業の安全性への配慮が求められる。

4. 教員の人柄

授業を進める教員は、授業改善への意識や柔軟性を持ち、丁寧な指導を心がけることが求められている。学生の意見を聞く姿勢を持つことや、時には適度な脱線やユーモアを交えながら学生との関係性を向上させることを通じて、教員の人柄にふれながら学びを進めることも学生にとっては重要な評価のポイントである。また、オムニバス形式の授業では、教員間の連携にも配慮したい。同時に学生は、教員のもつ熱意や授業に取り組む姿勢を感じ取りながら、自らの意欲の喚起や意識の変化を引き起こさせられることへの期待をもって受講していることにも留意しておきたい。

学生による授業評価項目

- ① この授業は、目的が明確であり、それにふさわしい内容だった。
- ② 授業計画（シラバス）は学習する上で役立った。
- ③ 成績評価の基準・手続きが示された。
- ④ 教員の説明は、わかりやすかった。
- ⑥ テキスト・プリント等、教材・器具は役立った。
- ⑦ 教員は、学生の参加をうながすため、適切な授業方法を工夫していた。
- ⑧ 教員は、学生が質問や意見を述べられるよう配慮していた。
- ⑨ 教員の熱意や丁寧な対応が感じられた。
- ⑩ 人権、安全への配慮がなされたいた。
- ⑪ 私は、授業を構成する一員であるという自覚をもって授業に臨んだ。
- ⑪ 私は、この授業からものの見方や考え方について知的刺激を受けた。
- ⑫ 私は、事前準備をして授業に臨み、授業内容を振り返り、自ら理解を深める努力をした。
- ⑬ （※複数教員担当科目のみ対象）授業の目的、内容、方法について教員間で連携がなされていた。
- ⑭ （※大学院授業科目のみ対象）「理論と実践の融合」について配慮がなされていた。

①～⑭の回答欄

4：そのとおり 3：ほぼそのとおり 2：あまりそうではない 1：そうではない

学生による授業評価からみた良い授業の構成要素についての分析

1. 分析対象

平成 26 年度から平成 30 年度までの授業評価のうち、学生による授業評価が 3.5 以上の授業科目について、記載された高評価自由記述を分析の対象とした。なお分析は、学部、修士、専門職の授業区分ごとに行い、対象となった自由記述数は全部で 4256 件であった。表 1 にデータの概要を示す。

表 1 分析対象とした自由記述の内訳

年度	区分	授業科目数			高評価自由記述数		
		前期	後期	計	前期	後期	計
平成26年度	学部	32	34	66	92	101	193
	修士	59	50	109	254	126	380
	専門職	22	12	34	169	44	213
	小計	113	96	209	515	271	786
平成27年度	学部	50	41	91	228	155	383
	修士	57	40	97	284	139	423
	専門職	19	8	27	119	18	137
	小計	126	89	215	631	312	943
平成28年度	学部	50	44	94	116	131	247
	修士	78	49	127	284	150	434
	専門職	23	18	41	107	105	212
	小計	151	111	262	507	386	893
平成29年度	学部	55	58	113	171	162	333
	修士	73	56	129	350	236	586
	専門職	18	7	25	34	10	44
	小計	146	121	267	555	408	963
平成30年度	学部	30	34	64	92	94	186
	修士	55	204	259	204	171	375
	専門職	29	29	58	56	54	110
	小計	114	267	381	352	319	671
合計		650	684	1,334	2,560	1,696	4,256

2. 分析手続き

分析の基本的な手続きは、次のとおりである。まず、それぞれの記述について意味的に類似しているものをまとめ、そのまとまりを表現する概念をカテゴリーとして抽出した。つぎに、そのカテゴリーについて意味的に類似しているものをまとめ、そのまとまりを表現する概念を上位カテゴリーとして抽出した。この作業を繰り返した。

その際、学部、修士課程、専門職学位課程の区分ごとに、さらに、学部では 3 つの授業規模（30 人以下、31～80 人、80 人以上）、修士では 2 つの授業規模（30 人以下、31 人以上）を考慮した。なお、平成 26 年度及び平成 27 年度自由記述にかかる分析結果については、平成 28 年度 FD 推進委員会活動報告書に記載済みである。

そして、令和元年度において、平成 28 年度から平成 30 年度までの授業科目について、同様の分析を行った。

3. 分析結果

すでに報告済みの平成 26 年度及び平成 27 年度分の結果に、このたび分析した平成 28 年度から平成 30 年度までの結果を加えて、新たに「学生による授業評価からみた良い授業の構成要素」を作成した。それが表 2～表 4 である。

表 2 学部にみる良い授業の構成要素

カテゴリー 1	カテゴリー 2	カテゴリー 3
授業	内容	わかりやすさ、有用性、多様性、多面性、具体性、体系性 内容の充実、深さ、考え方を学ぶ、思考の促進、知的刺激、 発見・気づき、省察性、主体性、専門性、 応用性
	教授行為	授業秩序、学生との距離感、自由に、適度の緊張感 説明力、的確さ、話術、受講生への配慮、丁寧さ、確認復習、 フィードバック、 整理された板書
	活動	体験型ワーク、グループワーク、ディスカッション、 受講者同士の交流、留学生との交流、意見交換、現職院生の 関与、実習、現場体験、 教室の一体感
	構成	目的・目標の明確さ、見通しの提示、体系性、授業展開、 受講者ニーズへの対応、現職教員の関与
	教材教具	充実した資料、教具
学習者	成果	知識の獲得、能力・技能の獲得、視野・視点の広がり、知的 刺激、楽しかった、面白かった、わかった、充実感・満足感、 達成感、有意義、意欲の喚起、意識の変化、感謝、驚き、 要望、 自信の獲得
教員	特性	人柄(意見を聞く姿勢、個人的魅力、言動、口調、有能さ) 考え方(学生第一)

表 3 修士課程にみる良い授業の構成要素

カテゴリー 1	カテゴリー 2	カテゴリー 3
授業	内容	わかりやすさ、理論と実践の融合、有用性、実践性、多様 性、多面性、具体性、専門性、内容の充実、思考の促進、 知的刺激、視点の転換、主体性、省察性、 問題提起 、講義とワークショップのバランス
	教授行為	フィードバック、双方向性、的確さ、意見や視点の開示、わ かりやすさ、受講生への配慮、丁寧さ、リラックス、 明確な

		評価基準、適度な脱線、個別対応・個別指導、順序立てた指導、テンポ
	活動	体験型ワーク、グループワーク、ディスカッション、参加型授業、学び合い、現場体験、経験、実習、実験、教員との相互性、密度の濃さ、安全性への配慮、探求できる課題、活動のバリエーション、チームワーク・個性の発揮、共有、やりたくない人への配慮、仲間と刺激し合う仕組み、五感、全員参加型（全員に意見や考えを発言する機会など）、ポスターセッション（ポスター発表）、適度な負担
	構成	目的・目標の明確さ、授業構成、工夫、一貫性、非単調受講者ニーズへの対応、質問及びそれへの回答時間の確保、見通し、外部講師・ゲストスピーカー、段階性（レポート課題→次回ディスカッション、一人で考える→隣の人と考える→グループで考える、など）
	教材教具	充実した資料、リアルな資料、事例の提示、現場の声、推薦書籍、カラー資料
	雰囲気	間違えても良い、周囲で助け合う、安心して仲間と対話できる、緊張感
学習者	成果	知識の獲得、能力・技能の獲得、視野・視点の広がり主体的学び、楽しかった、面白かった、満足感・充実感、有意義、素晴らしい、勉強になった、肯定、意欲の喚起、意識の変化、感謝、参加意識、要望、実践への活用、研究（修士論文）への活用、多様なメンバーとの出会い、自己省察・自己発見、自明性への懷疑、自身の使命の自覚、学び方の学び、快い疲労感
	事前学習	明確な予習内容・予習を基にしたディスカッション、資料の事前配付
教員	特性	人柄、熱心さ、教師としての姿勢、尊敬、丁寧な指導、話し方、教員の連携、豊富な知識と経験、ユーモア、受容的

表 4 専門職学位課程にみる良い授業の構成要素

カテゴリー 1	カテゴリー 2	カテゴリー 3
授業	内容	理論と実践の融合、有用性、実践性、具体性、わかりやすさ、多様性・汎用性、専門性、体系性、思考の促進、省察性、よかった、好奇心をみたす、適度な難易度、学校が抱える課題、多角的、多面的、教材研究、単元デザイン

	教授行為	フィードバック、ふり返り、相互性、双方向性、学生の意見の取り入れ、意見や視点の開示、的確さ、丁寧さ、リラックス、わかりやすさ、 予習課題
	活動	ペア・グループワーク 、体験型ワーク（ 模擬授業、ロールプレイ等 ）、 多様な活動の組み合わせ 、ディスカッション、経験密度の濃さ
	構成	目的・目標の明確さ、教員の分担と連携、受講者ニーズへの対応、一貫性、工夫、バランス、非単調
	教材教具	充実した資料、提示の工夫、ていねいな準備、現場の声（ ゲストティーチャー、ビデオ等 ）
学習者	成果	発見・気づき・ 刺激 、視野・視点の広がり、楽しかった、面白かった、勉強になった、参加意識、満足度高い、省察の機会、意欲の喚起、意識の変化、感謝、 知的興奮、学校へ還元できる、研究につながる
教員	特性	人柄、熱心さ、ユーモア、学生への配慮、丁寧さ、教師としての姿勢、学生第一、授業改善、 柔軟性、豊富な知識や経験

区分ごとにみられた特徴について、簡潔に言及しておく。

学部では、良い授業の評価基準として、わかりやすさ、有用性、相互交流、楽しさ、があるようである。一方では、専門性や応用性を求める学生もあり、整理された板書や受講生のニーズに合わせた授業を求める傾向もみられる。

修士課程では、良い授業の評価基準として、わかりやすさ、有用性、理論と実践の融合、充実した資料、知識の獲得、知的刺激、楽しさ、自信の獲得などがあるようである。一方、相互性（グループワーク、体験型ワーク）に対する意識もみられるようになっており、相互交流における配慮などへのコメントも多い。

専門職学位課程では、良い授業の評価基準として、理論と実践の融合、具体性、わかりやすさ、多様性、フィードバック、グループワーク、充実した資料、があるようである。学校への還元や汎用性などへの要望が特徴的にみられる。

7. 令和元年度 他大学等のFD研究会等参加状況一覧

No.	所属	役職	氏名	用務内容	日程	用務先
1	教育実践高度化専攻 生徒指導実践開発コース	教授	松本 剛	関西地区FD連絡協議会第12回総会	2019/5/11(土)	関西地区FD連絡 協議会 (大阪大学)
2	教員養成・研修高度化センター	准教授	泉村 靖治	ポアアイ4大学合同FDセミナー 「誰でもできる授業のひと工夫」	2019/6/28(金)	神戸学院大学
3	人間発達教育専攻 生活・健康・情報系教育コース	助教	花輪 由樹	ポアアイ4大学合同FDセミナー 「誰でもできる授業のひと工夫」	2019/6/28(金)	神戸学院大学
4	教員養成・研修高度化センター	准教授	泉村 靖治	2019年度FD研修会 「学生を授業に参加させる秘訣 ーアクティブ・ラーニングの魅力ー」	2019/8/9(金)	滋賀県立大学
5	教員養成・研修高度化センター	准教授	泉村 靖治	関西地区FD連絡協議会 第16回「授業づくりワークショップ (2日間／通い型)」	2019/9/28(土) ～29(日)	大阪大学

Ⅲ 資 料

本学におけるFDの定義について

兵庫教育大学におけるFDとは、本学のミッション及びビジョンを実現するために、大学院・学部におけるカリキュラムや授業についての内容・方法・評価等に関して、教員と事務職員が協働し、学生の参画を得て行う、教育の質保証をめざすあらゆる取組のことである。

【定義のポイント】

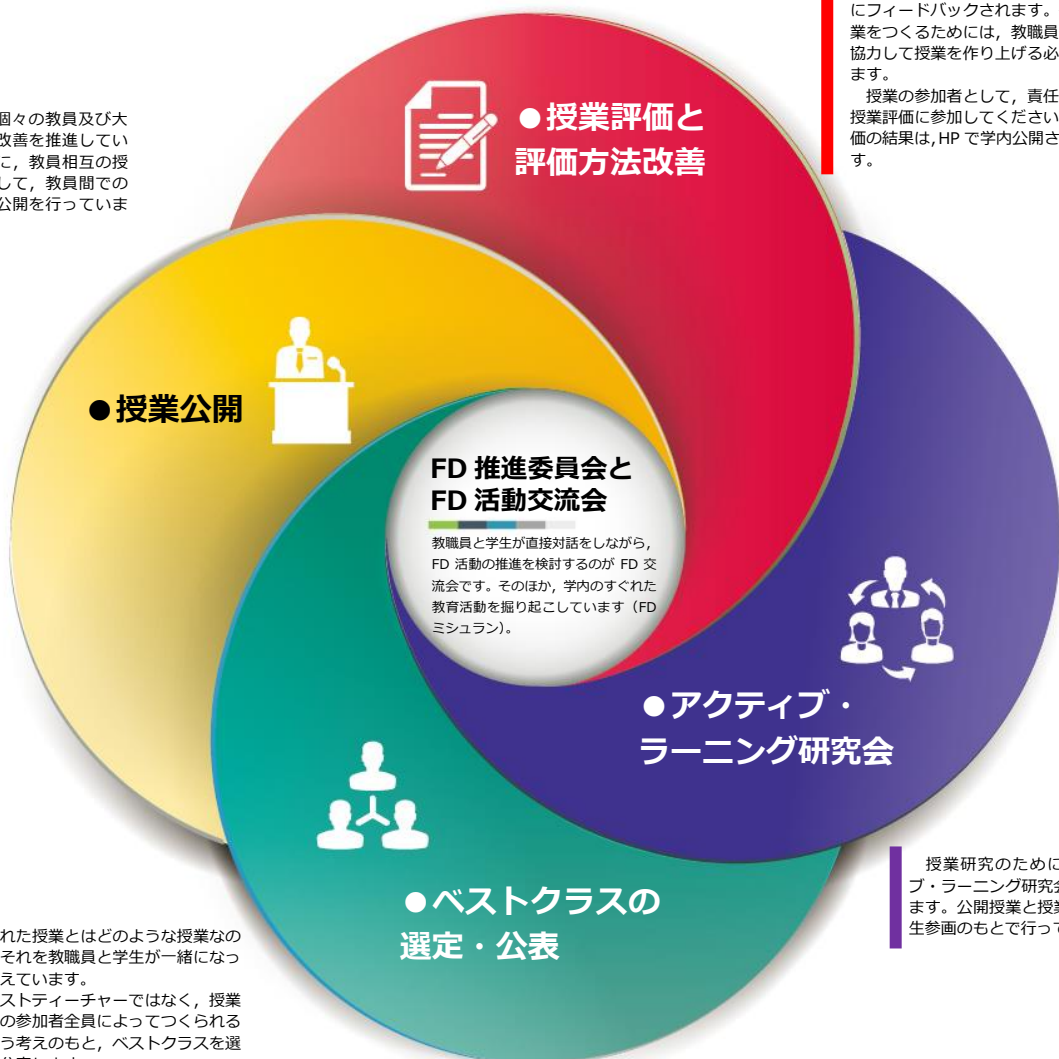
- (1) 本学のミッション及びビジョンを実現すること (What for)
- (2) 全学で日常的に行われる全ての教育改善活動や学修支援活動をFD活動と認識すること (What)
- (3) 教員と事務職員が協働し、学生の参画を推進すること (Who)
- (4) 教育の質保証及び教育力向上をめざすあらゆる取組の妥当性、有効性について継続的に検証を行い、更なる改善・充実を組織的に図ること (How)

兵庫教育大学における FD 推進活動への取り組み

FD とは、ファカルティ・ディベロップメントの略で、教育の質保証をめざす取り組みのことです。

本学における FD とは、本学のミッション及びビジョンを実現するために、大学院・学部におけるカリキュラムや授業についての内容・方法・評価等に関して、教員と事務職員が協働し、学生の参画を得て行う、教育の質保証をめざすあらゆる取り組みを指しています。

本学では、個々の教員及び大学全体の授業改善を推進していくことを目的に、教員相互の授業研究の場として、教員間での日常的な授業公開を行っています。



前期末および後期末に全ての授業で授業評価を行っています。評価結果は10～11月（前期）と4～5月（後期）にフィードバックされます。優れた授業をつくるためには、教職員と学生が協力して授業を作り上げる必要があります。

授業の参加者として、責任を持って授業評価に参加してください。授業評価の結果は、HP で学内公開されています。

優れた授業とはどのような授業なのか。それを教職員と学生が一緒になって考えています。

ベストティーチャーではなく、授業はその参加者全員によってつくられるという考えのもと、ベストクラスを選定し公表します。

授業研究のために、アクティブ・ラーニング研究会を行っています。公開授業と授業研究会を学生参画のもとで行っています。

○国立大学法人兵庫教育大学ファカルティ・ディベロップメント推進委員会規程

(平成 16 年 4 月 1 日規程第 17 号)

改正 平成 17 年 3 月 31 日 平成 17 年 9 月 6 日
平成 18 年 3 月 8 日 平成 18 年 7 月 12 日
平成 18 年 12 月 6 日 平成 19 年 3 月 14 日
平成 20 年 1 月 16 日 平成 20 年 3 月 11 日
平成 23 年 3 月 14 日 平成 24 年 3 月 26 日
平成 25 年 4 月 2 日 平成 28 年 1 月 13 日
平成 29 年 3 月 29 日 平成 29 年 6 月 30 日
平成 31 年 2 月 12 日

(設置)

第 1 条 国立大学法人兵庫教育大学(以下「本学」という。)におけるファカルティ・ディベロップメント(教育の内容及び方法の改善を図るための組織的な研修及び研究。以下「FD」という。)の推進を図るため、国立大学法人兵庫教育大学ファカルティ・ディベロップメント推進委員会(以下「委員会」という。)を置く。

(構成)

第 2 条 委員会は、次の各号に掲げる者をもって組織する。

- (1) 副学長のうち学長が指名した者 1 人
- (2) 教育支援担当の学長特別補佐
- (3) 次のア、イ及びウの区分により各専攻からの推薦に基づき学長が指名した者
 - ア 人間発達教育専攻に所属する教授、准教授、講師又は助教 2 人
 - イ 特別支援教育専攻に所属する教授、准教授、講師又は助教 1 人
 - ウ 教育実践高度化専攻(教育政策リーダーコースを除く。)に所属する教授、准教授、講師又は助教 3 人

(4) 学長が指名した者

- 2 前項第 3 号及び第 4 号に規定する委員の任期は、2 年とする。ただし、欠員を生じた場合の後任の委員の任期は、前任者の任期の残余の期間とする。
- 3 前項の規定による委員は、再任されることができる。

(委員長及び副委員長)

第 3 条 委員会に委員長及び副委員長を置き、委員長は、前条第 1 項第 2 号に規定する学長特別補佐をもって充て、副委員長は、委員の互選によって定める。

- 2 委員長は、委員会を招集し、議長となる。
- 3 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故があるときは、委員長の職務を代行する。

(所掌事項)

第 4 条 委員会は、次の各号に掲げる事項を企画し、及び実施する。

- (1) FD に係る調査・研究に関すること。
- (2) 教育の内容及び方法を改善するための支援に関すること。
- (3) 教育改善に係る評価に関すること。
- (4) その他 FD に関すること。

(議事)

第 5 条 委員会は、委員の 3 分の 2 以上の出席がなければ議事を開き、議決することができない。

- 2 委員会の議事は、出席委員の過半数でこれを決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

(代理出席)

第5条の2 委員会は、第2条第1項第3号に規定する委員が事故その他やむを得ない理由により委員会に出席できないときは、当該委員が所属する専攻の教授、准教授、講師又は助教を代理者として出席させることができる。

2 前項の規定により代理者を出席させた場合は、当該代理者を委員とみなす。

(委員以外の者の出席)

第6条 委員会は、必要があると認めるときは、委員以外の者の出席を求め、意見を聴くことができる。

(専門委員会等)

第7条 委員会が必要と認めるときは、専門的な事項を調査検討するため、専門委員会等を置くことができる。

(事務)

第8条 委員会に関する事務は、教育研究支援部学務課が処理する。

(雑則)

第9条 この規程に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、別に定める。

附 則

この規程は、平成16年4月1日から施行する。

附 則(平成17年3月31日)

この規程は、平成17年4月1日から施行する。

附 則(平成17年9月6日)

この規程は、平成17年9月6日から施行する。

附 則(平成18年3月8日)

この規程は、平成18年4月1日から施行する。

附 則(平成18年7月12日)

この規程は、平成18年7月12日から施行する。

附 則(平成18年12月6日)

この規程は、平成19年4月1日から施行する。

附 則(平成19年3月14日)

1 この規程は、平成19年4月1日から施行する。

2 この規程施行後第2条第1項第2号の規定に基づき最初に指名された委員の任期は、同条第2項の規定にかかわらず、学長が定める。

附 則(平成20年1月16日)

この規程は、平成20年4月1日から施行する。

附 則(平成 20 年 3 月 11 日)

この規程は、平成 20 年 4 月 1 日から施行する。

附 則(平成 23 年 3 月 14 日)

- 1 この規程は、平成 23 年 4 月 1 日から施行する。
- 2 この規程施行後第 2 条第 1 項第 3 号及び第 4 号の規定に基づき最初に指名された委員の任期は、同条第 2 項の規定にかかわらず平成 24 年 3 月 31 日までとする。

附 則(平成 24 年 3 月 26 日)

この規程は、平成 24 年 4 月 1 日から施行する。

附 則(平成 25 年 4 月 2 日)

この規程は、平成 25 年 4 月 2 日から施行し、平成 25 年 4 月 1 日から適用する。

附 則(平成 28 年 1 月 13 日)

- 1 この規程は、平成 28 年 4 月 1 日から施行する。
- 2 この規程施行後第 2 条第 1 項第 3 号及び第 4 号の規定に基づき最初に指名された委員の任期は、同条第 2 項の規定にかかわらず、学長が定める。

附 則(平成 29 年 3 月 29 日)

この規程は、平成 29 年 4 月 1 日から施行する。

附 則(平成 29 年 6 月 30 日)

この規程は、平成 29 年 7 月 1 日から施行する。

附 則(平成 31 年 2 月 12 日)

- 1 この規程は、平成 31 年 4 月 1 日から施行する。
- 2 この規程施行の際、現に改正前の第 2 条第 1 項第 3 号の規定に基づき特別支援教育専攻から推薦された委員である者は、改正後の第 2 条第 1 項第 3 号の規定に基づき同専攻から推薦された委員、教科教育実践開発専攻に所属する者として専攻から推薦された委員である者のうち、芸術系教育コースに所属する者は、改正後の第 2 条第 1 項第 3 号の規定に基づき人間発達教育専攻に所属する者として専攻から推薦された委員、理数系教育コースに所属する者は、改正後の第 2 条第 1 項第 3 号の規定に基づき教育実践高度化専攻に所属する者として専攻から推薦された委員であるとみなし、その任期は、同条第 2 項の規定にかかわらず残任期間と同一の期間とする。

平成 21 年 11 月 6 日
学 長 裁 定
改正 平成 26 年 6 月 2 日

授業公開の実施に関する申合せ

1 授業公開の目的

本学における教員相互の「授業研究」の場として設定し、個々の教員及び大学全体の授業改善を推進していくことを目的とする。

2 対象授業

原則として、授業は全面公開とする。ただし、授業担当教員が公開することが適切でないと判断した授業については除外する。

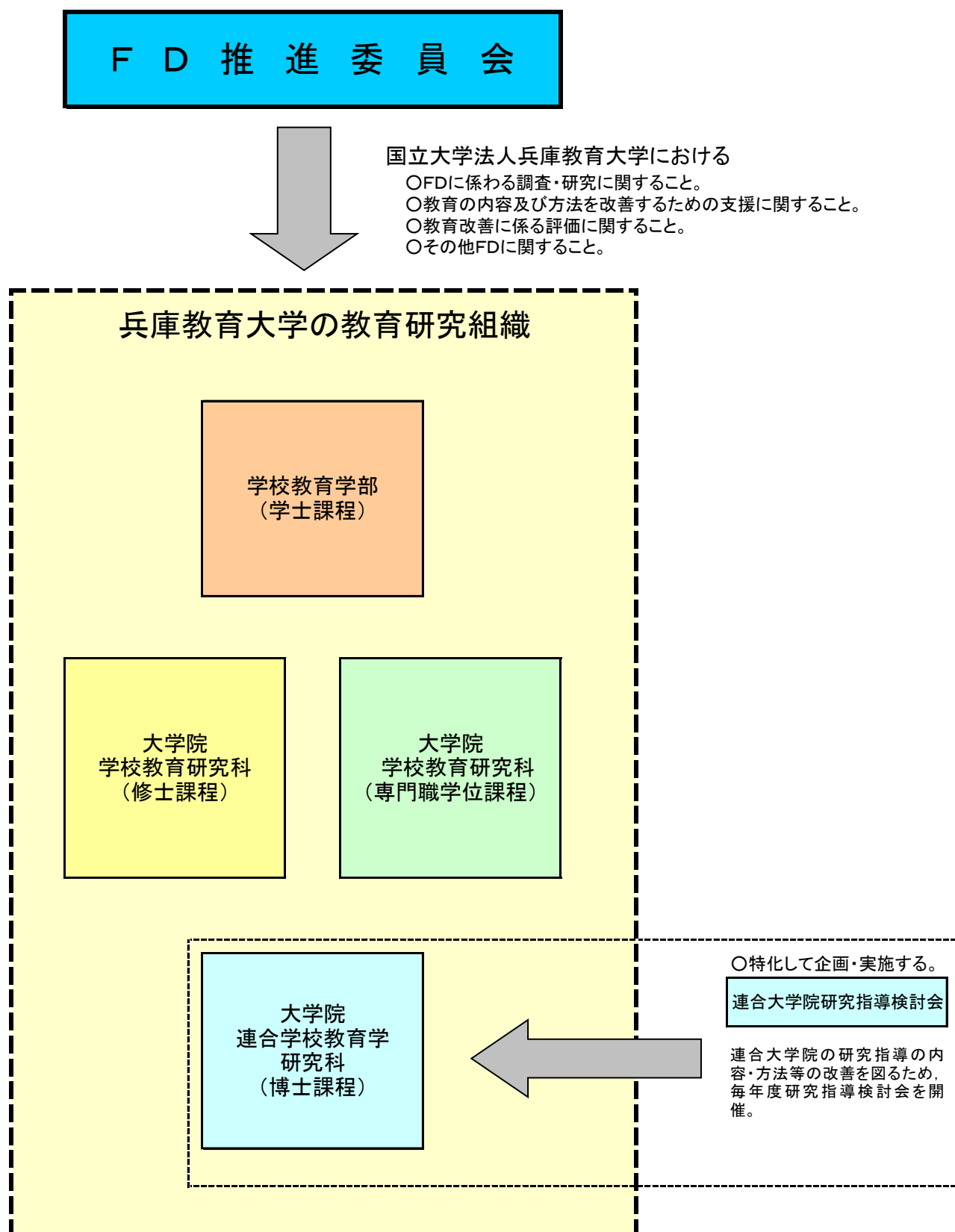
3 公開期間

各教員においては、日常的に「授業研究」を行い、授業の改善に努めているところであるが、このような大学組織としての「授業研究」をさらに推進するため、個々の授業科目において授業公開を行うことができるものとする。その場合、授業公開に参加を希望する教職員は、当該授業担当教員に対し事前に了承を得るものとする。ただし、日常の教育活動を保証するため、次の期間については公開の対象としない。

- (1) 定期試験の期間
- (2) 学期当初の期間（1～2週間）
- (3) 実地教育等に関わる期間

FD活動

本学におけるFD推進委員会と教育研究組織との関連図



ファカルティ・ディベロップメント推進委員会委員名簿

平成31年4月1日現在

所 属 等	職 名	氏 名	任 期	備 考
—	副学長	須田 康之	—	第1号委員
—	学長特別補佐 (教育支援担当)	松本 剛	—	委員長 第2号委員
人間発達教育専攻 芸術表現系教育コース	准教授	浅海 真弓	2018.4. 1 ～2020.3.31	第3号委員
人間発達教育専攻 生活・情報・健康系教育コース	教 授	岸田 恵津	2019.4. 1 ～2021.3.31	〃
特別支援教育専攻 発達障害支援実践コース	准教授	石橋 由紀子	2018.4. 1 ～2020.3.31	〃
教育実践高度化専攻 学校臨床科学コース	教 授	山中 一英	2019.4. 1 ～2021.3.31	〃
教育実践高度化専攻 理数系教科マネジメントコース	准教授	石原 諭	2018.4. 1 ～2020.3.31	〃
教育実践高度化専攻 小学校教員養成特別コース	教 授	初田 隆	2019.4. 1 ～2021.3.31	〃
—	副学長	吉水 裕也	2019.4. 1 ～2021.3.31	第4号委員